東京国立文化財研究所要覧

1993

平成5年度

はじめに

平成５年度は，東京国立文化財研究所の前身である美術研究所設立以来63周年を迎えた。平成２年に発足したアジア文化財保存研究室も本年から国際文化財保存修復協力室に改組され，国際的な文化財保存修復に関する協力のためのセンター構想の充実化に向けて大きく前進した年でもある。その関連事業として，平成５年10月にはアジア15カ国及び国際文化財保存修復研究センター（ICCROM）から文化財専門家を招へいして「文化財保存における伝統的な材料と技術」というテーマで，第４回のアジア文化財保存セミナーを開催，大きな成果を収めることが出来た。また，諸外国からの強い要望にこたえてはじめられた，「紙の保存修復」国際研修も実施された。一方，昭和61年から進めてきた敦煌莫高窟壁画保存修復事業については，平成２年度に敦煌研究院と合意書を取り交わし，一昨年度より５カ年にわたる本格的な日中共同研究が進められている。さらに海外所在の日本古美術品修復事業も昨年に引き続いて，ワシントン・フリーア美術館所蔵の日本絵画の修復を実施し，またスミソニアン研究機構との保存科学研究交流も引き続き順調に進行中である。その他の国際交流事業としては，本年度17年目となる国際研究集会を「漆文化財の保存」のテーマのもと，８名の研究者を海外から迎えて，充実した討議が行われた。この他文化財に関する個別的な研究機関として，高い評価を得ることが出来たことは，喜びに堪えない。

この年度を終わるに当って，４名の職員を退職等で見送ることになったが，当研究所の発展に尽力された諸先輩の御努力に対し心から敬意と謝意を表する次第である。

平成６年３月

東京国立文化財研究所長

西川　杏太郎

目　　次

Ⅰ．沿　　革 …… 1
1．設立の経緯 …… 1
2．年代別重要事項 …… 1
3．歴代所長 …… 6

Ⅱ．機構・職員・予算 …… 7
1．機　　構 …… 7
2．職　　員 …… 8
3．名誉研究員 …… 11
4．予　　算 …… 12
5．特別研究一覧 …… 13
6．科学研究費補助金交付一覧 …… 13
7．受託研究一覧 …… 14

Ⅲ．調査研究 …… 15
中長期研究計画一覧 …… 15
1．美術部 …… 17
(1) 概　　要 …… 17
(2) 各　　論 …… 18
2．芸能部 …… 22
(1) 概　　要 …… 22
(2) 各　　論 …… 24
3．保存科学部 …… 26

(1) 概　　要……26
(2) 各　　論……27
4．修復技術部……38
(1) 概　　要……38
(2) 各　　論……39
5．情報資料部……43
(1) 概　　要……43
(2) 各　　論……44
6．国際文化財保存修復協力室……48
(1) 概　　要……48
(2) 各　　論……48
7．国際調査研究……52
(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究……52
(2) スミソニアン研究機構との国際研究協力……54
(3) 海外所在日本美術品調査……54
(4) タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究……55
(5) 文化財保護に関する日独学術交流……55
8．主要研究業績……56

IV．事　　業……78
1．出　　版……78
(1) 美術研究……78
(2) 日本美術年鑑……79
(3) 芸能の科学……79
(4) 保存科学……79
(5) 国際研究集会プロシーディングス……80

2．黒田清輝巡回展……83
3．公開学術講座……83
4．夏期学術講座……84
5．博物館・美術館等保存担当学芸員研修……85
6．国際研究集会……87
7．アジア文化財保存セミナー……89
8．第2回「紙の保存修復」の国際研修……92
9．会　　議……95
(1) 第1回国際文化財保存修復協力センター〈仮称〉
設置に関する調査研究会……95
(2) 文化財保存修復研究協議会……95
10．国際・国内交流……97
(1) 職員の海外渡航……97
(2) 招へい研究員等……99
(3) 海外研究者等の来訪……103

V．研究施設・設備……104
1．蔵　　書……104
2．資　　料……105
3．主要機器・設備……106
4．黒田記念室……109
5．閲　覧　室……109

VI．関係法規……110

I．沿　革

1．設立の経緯

東京国立文化財研究所は，昭和27年４月１日に発足したが，その前身であり母体となったものは，昭和５年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は，大正13年７月，帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は，故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し，また，わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

(1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。

(2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。

(3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。

(4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2．年代別重要事項

昭和元年12月　前記の事業を遂行するため委員会が組織され，東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し，美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄，黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清，建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎，会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和２年２月　美術研究所準備事業を開始した。

同　年10月　東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造，半地階２階建，延面積1,192㎡の建物１棟を起工した（本館）。

沿　　革

昭和３年９月　　前記の建物が竣工したので，黒田記念館と名付け，美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し，また，館内に黒田子爵記念室を設け，黒田清輝の作品を陳列した。

昭和４年５月　　遺言執行人代表者樺山愛輔は，建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

昭和５年６月28日　勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ，東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同　年10月17日　美術研究所開所式を挙行した。

昭和７年１月　　美術研究所の研究成果発表機関誌として，定期刊行物『美術研究』を創刊した。

同　年４月18日　株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う５か年間毎年５千円，合計２万５千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同　年５月26日　帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け，美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

昭和９年10月18日　毎年10月18日を開所記念日と定めた。

昭和10年１月28日　鉄筋コンクリート造，２階建，延面積129㎡の書庫が竣工した。

同　年４月　　『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。

同　年６月１日　勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規定を制定し，閲覧事務を開始した。

昭和12年６月24日　勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され，従来，帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同　年11月29日　美術研究所長職務規程，美術研究所事務分掌規程が制定された。

昭和13年２月12日　木造，平屋建，延面積97㎡の写真室１棟が竣工した。

昭和19年８月10日　黒田清輝の作品，並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

昭和20年5月28日　美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同　年7～8月　酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため，さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

昭和21年3月29日　酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同　年4月4日　酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し，引揚げを完了した。

同　年4月16日　東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

昭和22年5月1日　美術研究所官制が廃止され，国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し，研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66m²)に設けた。

昭和25年8月29日　文化財保護法の制定にともない，美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同　年8月29日　文化財保護委員会事務局設置にともない，保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

昭和26年1月31日　美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

昭和27年4月1日　文化財保護法の一部が改正，東京文化財研究所組織規程が定められ，美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ，美術研究所組織規程が廃止された。

また，文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同　年7月1日　芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し，研究を開始した。

沿　　革

昭和28年４月26日　保存科学部研究室として，東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

昭和29年７月１日　東京文化財研究所組織規程の一部が改正され，東京国立文化財研究所となった。

昭和32年３月22日　東京国立博物館構内に木造，外部鉄網モルタル塗，平屋建，８㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同　年11月30日　従来の２階建書庫のうえにさらに１階を増築３階建とし，増築分延面積71㎡が竣工した。

昭和34年４月30日　東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ，この年度から受託研究が開始された。

昭和36年９月16日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され，従来の庶務室は庶務課となった。

昭和37年３月31日　東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として，鉄筋コンクリート造，２階建，延面積663㎡の建物１棟が竣工した。

同　年７月１日　東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され，新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同　年７月20日　芸能部研究室は，保存科学部庁舎の竣工にともない，旧保存科学部庁舎に移転した。

昭和43年６月15日　文部省設置法の一部が改正され，本研究所は文化庁附属機関となった。

昭和44年８月23日　保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。

昭和45年３月25日　前記の別館が竣工したので，同年５月26日竣工式が行われた。

同　年３月25日　芸能部は，別館３階に移転した。

同　年５月８日　保存科学部は別館の地階～２階に実験用機械類の移転据付を完了した。

同　年６月29日　保存科学部庁舎の１階の模様替工事に着手し，同年10月15日工事が完了した。

同　年11月２日　所長及び庶務課は，本館から保存科学部庁舎の１階に移転し

た(本館は，美術部庁舎となる)。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

昭和46年４月１日　保存科学部庁舎及び別館の敷地2.658㎡を東京国立博物館から所管換された。

昭和48年４月12日　文部省設置法施行規則の一部が改正され，新たに修復技術部が設けられ４部１課となり，修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ，保存科学部修理技術研究室は廃止された。

昭和52年４月18日　文部省設置法施行規則の一部が改正され，情報資料部の新設により５部１課となり，情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ，美術部資料室は廃止された。

昭和53年３月20日　本館構内の写場等（木造，平屋建，延面積144㎡）を取りこわし，情報資料部研究棟として，鉄筋コンクリート造，地下１階，地上３階，延面積569.95㎡の建物が竣工した。

昭和53年４月５日　文部省設置法施行規則の一部が改正され，新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

昭和59年６月28日　文部省組織令が改正され，本研究所は文化庁施設等機関となった。

平成２年10月１日　文部省設置法施行規則の一部が改正されて新たにアジア文化財保存研究室が置かれ，５部１室１課となった。

平成５年４月１日　文部省設置法施行規則の一部が改正されてアジア文化財保存研究室は，国際文化財保存修復協力室となった。

3．歴代所長（昭和５年～平成５年）

主　　事	正木直彦	（昭和 5．6.28～昭和 6.11.24）
主　　事	矢代幸雄	（昭和 6.11.25～昭和10．5.31）
所長事務取扱	和田英作	（昭和10．6．1～昭和11．6.21）
所　　長	矢代幸雄	（昭和11．6.22～昭和17．6.28）
所長事務取扱	田中豊蔵	（昭和17．6.29～昭和22．8.15）
所　　長	田中豊蔵	（昭和22．8.16～昭和23．5.10）
所長代理	福山敏男	（昭和23．5.11～昭和24．8.30）
所　　長	松本栄一	（昭和24．8.31～昭和27．3.31）
所長事務代理	矢代幸雄	（昭和27．4．1～昭和28.10.31）
所　　長	田中一松	（昭和28.11．1～昭和40．3.31）
所　　長	関野　克	（昭和40．4．1～昭和53．4．1）
所　　長	伊藤延男	（昭和53．4．1～昭和62．3.31）
所　　長	濱田　隆	（昭和62．4．1～平成 3．3.31）
所　　長	西川杏太郎	（平成 3．4．1～現　　在）

II. 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1．機　　構

2．職　　員

（平成6年3月30日現在）

所属	職名	氏名	専門分野
所長	所長	西川杏太郎	（美術史）
庶務課	課長	富澤邦明	
	国際交流主幹	貴志辰夫	
	課長補佐	長谷川憲康	
庶務係	係長	大堀岳満	
	係員	相澤かず子	
	事務補佐員	望月紀子	
	〃	勝木なほ子	
	技能補佐員	堺　良子	
	調査員（非）	大江佐知子	
会計係	係長	篠原一夫	
	係員	日高信二	
	〃	宮腰香代子	
	事務補佐員	山田文子	
	〃	小菅陶子	
	労務補佐員	菊地廣吉	
美術部	部長	鶴田武良	（中国絵画史）
	主任研究官	佐藤道信	（日本近代絵画史）
	〃	島尾　新	（日本中世絵画史）
	〃	山梨絵美子	（日本近代絵画史）
第一研究室	室長	中野照男	（東洋絵画史）
	研究員	岡田　健	（中国彫刻史）
	調査員（非）	佐野みどり	（日本絵画史）
第二研究室	室長	三輪英夫	（日本近代絵画史）
芸能部	部長	蒲生郷昭	（日本音楽史）
演劇研究室	室長	鎌倉惠子	（日本近世演劇）
	調査員（非）	高橋美都	（日本音楽史）
音楽舞踊研究室	室長	羽田昶	（日本中世演劇）
	研究員	高桑いづみ	（日本音楽史）
	調査員（非）	丸茂美恵子	（舞踊学）

所属	職名	氏名	専門分野
民俗芸能研究室	室長	中村茂子	(民俗芸能)
	調査員(非)	山本宏子	(民俗音楽)
保存科学部	部長	三浦定俊	(計測工学)
	主任研究官	佐野千絵	(光化学)
化学研究室	室長	平尾良光	(無機化学)
物理研究室	室長事務取扱	三浦定俊	(計測工学)
	研究員(併)	石川陸郎	(光学)
生物研究室	室長	門倉武夫	(環境科学)
	研究員	木川りか	(生物化学)
	調査員(非)	山野勝次	(応用昆虫学)
	〃	新井英夫	(微生物学)
修復技術部	部長	三輪嘉六	(考古学)
	主任研究官	川野邊渉	(高分子化学)
第一修復技術研究室	室長	中里壽克	(漆芸技法)
第二修復技術研究室	室長	増田勝彦	(装潢技術)
	研究員	尾立和則	(装潢技術)
第三修復技術研究室	室長	青木繁夫	(考古学)
	技術補佐員	犬竹和	
情報資料部	部長	廣井雄一	(日本工芸史)
	主任研究官	井手誠之輔	(東洋絵画史)
文献資料研究室	室長	米倉迪夫	(日本中世絵画史)
	研究員	勝木言一郎	(中国絵画史)
写真資料研究室	室長	鈴木廣之	(日本近世絵画史)
	研究員	長岡龍作	(日本彫刻史)
	専門職員	野久保昌良	(美術写真)
国際文化財保存修復協力室	室長	西浦忠輝	(材質改良学)
	主任研究官	松本修自	(建築史)
	研究員	朽津信明	(地質学)
保存科学部	客員研究員	二宮修治	(無機化学)
修復技術部	〃	松田史朗	(腐食工学)
情報資料部	〃	伊與田光宏	(情報工学)

平成５年度における異動者

所属	官職名	氏名	異動日	異動内容
庶務課	係員	宮腰香代子	平５．５．１	採用
	事務補佐員	小菅陶子	平５．９．１	採用
	調査員(非)	大江佐知子	平５．７．15	採用
美術部	主任研究官	山梨絵美子	平５．７．１	昇任
芸能部	室長	鎌倉恵子	平５．４．１	昇任
	室長	羽田昶	平５．４．１	配置換
保存科学部	部長	三浦定俊	平５．４．１	昇任
	主任研究官	佐野千絵	平５．７．１	昇任
	研究員(併)	石川陸郎	平５．４．１	併任
	室長	門倉武夫	平５．４．１	昇任
	研究員	木川りか	平５．６．１	採用
	調査員(非)	新井英夫	平５．６．30	採用
情報資料部	部長	廣井雄一	平５．４．１	昇任
	主任研究官	井手誠之輔	平５．７．１	昇任
国際文化財	室長	西浦忠輝	平５．４．１	配置換
保存修復協	主任研究官	松本修自	平５．10．１	転任
力室	研究員	朽津信明	平５．４．１	配置換
保存科学部	客員研究員	二宮修治	平５．４．１	採用
修復技術部	客員研究員	松田史朗	平５．４．１	採用

平成５年度における退職者等

所属	官職名	氏名	在所期間	備考
庶務課	課長	富澤邦明	平４．４．１～平６．３．31	転出
	課長補佐	長谷川憲康	平元．３．１～平６．３．31	転出
	係員	相澤かず子	平元．５．１～平６．３．31	転出
	事務補佐員	渡邊和子	平４．４．１～平５．８．31	退職
	技能補佐員	堺良子	平２．4.10～平６．３．30	退職
	調査員(非)	松原美智子	昭59．８．１～平５．７．15	退職
芸能部	調査員(非)	高橋美都	昭60．４．１～平６．３．31	退職
	調査員(非)	丸茂美恵子	平元．４．１～平６．３．31	退職
修復技術部	部長	三輪嘉六	平２．４．１～平６．３．31	転出

3．名誉研究員

氏　　名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員発令年月日
白畑よし		昭5. 6.30～昭27. 8. 1	53.10.18
福山敏男	美術部長	昭23. 5.11～昭34. 4.15	〃
高田　修	〃	昭27.12. 1～昭44. 3.31	〃
登石健三	保存科学部長	昭27.10. 1～昭50. 4. 1	〃
岡　畏三郎	美術部長	昭20. 5.15～昭51. 4. 1	〃
中村傳三郎	美術部第二研究室長	昭22.10. 1～昭53. 4. 1	〃
関野　克	所長	昭40. 4. 1～昭53. 4. 1	〃
秋山光和	美術部第一研究室長	昭16.10. 1～昭42. 2. 1	54.10.18
久野　健	情報資料部長	昭20. 5.31～昭57. 4. 1	57.10.18
川上　涇	美術部長	昭21. 2.28～昭57. 4. 1	〃
関　千代	美術部第二研究室長	昭18.12.15～昭58. 4. 1	58.10.18
横道萬里雄	芸能部長	昭28. 3.16～昭51. 4. 1	59.10.18
上野アキ	情報資料部文献資料研究室長	昭17.11. 3～昭59. 4. 1	〃
江上　綏	情報資料部主任研究官	昭38. 5.18～昭59. 3.31	〃
田村悦子	美術部主任研究官	昭22. 6.16～昭60. 3.31	60.10.18
猪川和子	情報資料部文献資料研究室長	昭22. 6.27～昭60. 3.31	〃
伊藤延男	所長	昭53. 4. 1～昭62. 3.31	62.10.18
柳澤　孝	美術部長	昭27. 4. 1～昭62. 3.31	〃
三隅治雄	芸能部長	昭27.10. 1～昭63. 3.31	63.10.18
樋口清治	修復技術部長	昭37.11. 1～昭63. 3.31	〃
田實榮子	美術部主任研究官	昭23. 3.31～平元. 3.31	1.10.18
見城敏子	保存科学部物理研究室長	昭34. 4. 1～平元. 3.31	〃
濱田　隆	所長	昭62. 4. 1～平4. 3.31	3.10.18
関口正之	美術部長	昭42. 2. 1～平3. 3.31	3.10.18
佐藤道子	芸能部長	昭34. 4. 1～平4. 3.31	4. 4. 1
馬淵久夫	保存科学部長	昭50.10. 1～平4. 3.31	4. 4. 1
新井英夫	保存科学部長	昭45. 9. 1～平5. 3.31	5. 4. 1
石川陸郎	保存科学部主任研究官	昭32. 4.15～平5. 3.31	5. 4. 1

4．平成5年度予算

（　）は補正後を表す

事　　項	金　　額
	千円
	(359,929)
人件費	347,851
	(246,415)
運営費	266,517
	(30,974)
事業管理	34,696
	(41,605)
一般研究	44,922
	(98,805)
特別研究	106,887
	(2,404)
受託研究	2,404
	(72,627)
文化財保存修復の国際交流事業の促進等	77,608
	(9,900)
施設費	11,000
文部省	14,989
各所修繕	5,558
在外研究員旅費	9,431
計	(631,233) 640,357

5．平成５年度特別研究一覧

事　　項	金　　額
	千円
中国仏教美術基準作品調査研究	6,337
伝統芸能（無形文化財）における「鬼」の実証的研究	4,551
国際文化財保存修復協力センター（仮称）設置のための調査	7,204
有形・無形文化財研究支援データベースシステムの構築に関する調査研究	2,791
鉄器材質の歴史的変遷に関する研究	4,562
博物館等館内における環境制御に関する研究	1,850
文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	39,135
研究用機器整備（全自動Ｘ線回折装置）	32,375
計	98,805

6．平成５年度科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研　究　課　題	研究代表者	交付額
			千円
重点領域研究	化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究	三浦　定俊	10,800
総合研究(A)	雅楽古楽器の総合的調査研究	蒲生　郷昭	2,000
総合研究(A)	古代東アジアの青銅製品鋳造に関する基礎的研究	平尾　良光	10,000
一般研究(A)	文化財の修理・修復の情報化に関する基礎的研究	三輪　嘉六	3,000
一般研究(A)	東アジア美術における人のかたち	鶴田　武良	5,000
一般研究(B)	出土鉄器の鉛同位体法による原料産地の推定	平尾　良光	1,000
一般研究(B)	民俗芸能にみられる狂言様式の分類と芸能史的位置づけの研究	中村　茂子	500
一般研究(B)	画像と言語－東洋美術史における比較研究－	鈴木　廣之	1,000
一般研究(B)	文化財におよぼす酸性霧の影響に関する研究	門倉　武夫	1,400

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
			千円
一般研究(C)	メディアとしての請来美術研究－東アジアにおける仏教美術表現の伝播と受容－	井手誠之輔	1,100
一般研究(C)	エミシオグラフィによる象嵌の検出	三浦　定俊	1,400
一般研究(C)	絹の劣化度の科学的評価	佐野　千絵	1,900
試験研究(B)	木造古建築の保存を目的とした外装塗装（丹色塗装）の物性評価	西浦　忠輝	7,000
奨励研究(A)	則天武后期の仏像様式に関する研究－初唐様式から盛唐様式への展開－	岡田　健	900
国際学術研究	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処理に関する調査	西浦　忠輝	1,500
国際学術研究	科学技術を利用した文化財研究法の開発	西川杏太郎	5,100
国際学術研究	中国砂漠地帯における文化財の劣化現象に関する共同研究	三輪　嘉六	1,900
国際学術研究	漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究	三浦　定俊	6,500
計			62,000

7．平成5年度受託研究一覧

研究課題	受入額
	円
石ノ形古墳出土遺物の保存修復研究	1,604,000
太宰府市大字観世音寺内出土の漆手箱復元に関する研究	800,000
計	2,404,000

III. 調査研究

中長期研究計画一覧

部名	課題名	研究代表者	期間
美術部	＊美術に関する基礎資料の研究 －絵巻資料－	米倉　迪夫	平元．4 ～平 6．3
	＊美術に関する基礎資料の研究 －明治後半期美術資料－	三輪　英夫	平元．4 ～平 6．3
	＊美術に関する基礎資料の研究 －関東所在水墨画資料－	島尾　　新	平元．4 ～平 6．3
	＊美術に関する基礎資料の研究 －日本絵画史年紀史料収集15世紀－	鈴木　廣之	平元．4 ～平 6．3
	＊美術における地域性及び社会性の研究	三輪　英夫	平元．4 ～平 6．3
	＊近百年来中国絵画史研究	鶴田　武良	平2．4 ～平 9．3
	＊中国仏教美術基準作品調査研究	中野　照男	平4．4 ～平10．3
芸能部	＊伝統芸能における「鬼」の実証的研究	蒲生　郷昭	平4．4 ～平 8．3
	＊能楽の芸能学的調査研究	羽田　　昶	平2．4 ～平 7．3
	＊絵画資料による近世演劇の研究	鎌倉　惠子	平3．4 ～平 6．3
	＊日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究	蒲生　郷昭	平元．4 ～平 6．3
	＊芸能に用いられる武器の研究	中村　茂子	平5．4 ～平 8．3
	＊伝統的唱歌の研究	高桑いづみ	平5．4 ～平 8．3

調査研究

部　名	課　　題　　名	研究代表者	期　間
保存科学部	＊有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立	三浦　定俊	平元．4 ～平 7．3
	＊文化財施設内における保存展示条件の検討	三浦　定俊	平元．4 ～平 8．3
	＊鉄器材質の歴史的変遷に関する研究	平尾　良光	平3．4 ～平 6．3
修復技術部	＊文化財の伝統的修復材料の研究（第2期）	三輪　嘉六	平5．4 ～平 8．3
	＊文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究	三輪　嘉六	平4．4 ～平 9．3
情報資料部	＊美術情報処理システムの研究－データの共有化を中心として－	廣井　雄一	平元．4 ～平11．3
	＊美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究	鈴木　廣之	平元．4 ～平 6．3
	＊日本・東洋美術史文献データベースの開発	米倉　迪夫	昭63．4 ～平 6．3
国際文化財保存修復協力室	＊世界，特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集	西浦　忠輝	平3．4 ～平 7．3
	＊屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究	西浦　忠輝	平3．4～ 平 7．3

1. 美 術 部

(1) 概　　要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い，かつ，その成果を公表することを活動の目的としている。美術部は二室より構成され，第一研究室は古美術を担当し，第二研究室は近代・現代美術を担当している。

調査研究は各時代にわたり，絵画・彫刻・工芸の各分野について，作品と文献資料との両面から実証的に進め，ともに基礎となる研究資料の作成と整理とにつとめている。その他，現代美術の動向に関する調査と資料収集をも並行して行っている。また当部では，作品に対する科学的な鑑識法を早くから積極的に活用してきた。これも当部の研究活動の特色である。なお情報資料部員との間では，研究や調査の面において緊密な協力体制がとられている。

そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお，研究員それぞれの研究課題と内容は(2)の各論の項に示すとおりである。

調査研究の結果は，機関誌『美術研究』（昭和７年創刊）やその他の学会誌に発表し，単行の研究報告も随時刊行している。さらに，研究成果の一部を広く一般の理解に資するために，情報資料部との共同で毎年一回公開学術講座を開催している。また毎年『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行している。

なお美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品その他関係資料を保管し，毎週一回木曜の午後にはその多くを陳列する黒田記念室を公開している。

第一研究室

江戸時代までの日本美術及び東アジア地域の美術に関する調査研究並びに資料収集，公表を主務とする。また，『美術研究』の編集を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と，これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究，並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを行っている。とくに現代美術に関する調査研究においては，その年度に収集した資料を整理し，その成果を『日本美術年鑑』として毎年刊行している。平成5年度は，平成4年の内容をもった平成5年版を刊行し，引続き平成6年版の編集に着手した。

また，昭和52年度以来実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており，平成5年度は秋田市立千秋美術館で開催した。

(2) 各　　論

1．美術における地域性及び社会性の研究（5年計画の第5年次）

各地域における美術の史的展開には，それぞれの地域のもつ空間的諸特性にもとづく差異が大きく反映されていることは従来指摘されながらも，具体的な問題に即した総合的な解明は試みられていない。本研究は，地域固有の社会性ないし文化的側面における特殊性を重視し，地域間における交流の様態と，その伝播・受容の結果として行われる各地域内での変容の固有な形態を明らかにすることを目的とする。

(1) 中世美術の諸問題

1）外来の視覚情報の伝播経路とその発展の地域的差異

請来仏画作品に関する基礎資料の収集を継続した。とくに，近代になって日本より収集された欧米所蔵の宋元仏画および高麗・李朝仏画（パリ・ギメ美術館，ニューヨーク・メトロポリタン美術館，ボストン美術館）について，基礎資料を収集し，また研究成果の一部を発表した（「宋時代の阿弥陀画像」1994.1，26，於研究所）。

2）芸術家の社会的地位

能阿弥・芸阿弥・相阿弥について，公方同朋であり連歌師であり画家でもあるという特殊な存在様式について検討を加えた。

3）15・16世紀における絵画マーケット

当該の時期における鑑識・代付関係の史料を収集し，美術品の財産的価値と流通についての分析を行った。

4）画像と言語

文部省科学研究費（一般研究B・代表者：鈴木）の助成による研究を終え，収集した資料の整理を行うとともに，成果の一部を公表した（美術研究358）。

＜島尾，（情）鈴木，井手＞

(2) 西欧の美術と制度の移植過程の研究

1）日本近代美術と経済

日本近代美術は作品制作，受容の双方において資本主義経済の成長と関わって展開してきた。作品の社会的受容の一形態である美術品収集について，コレクター，コレクションの個別研究を数例試み，その成果を「歴史史料としてのコレクション」（「近代画説」2　明治美術学会刊），「野間コレクションと大衆社会」（「野間コレクションとその時代展」図録　新潟県立近代美術館）等に発表した。

2）日本近代のパブリック・アート

日本において美術品が広く公共に展観されるようになったのは明治以降のことである。公共の場の美術として壁画に注目し，その展開を油彩画を中心に考察した。

＜三輪，佐藤，山梨＞

2．美術に関する基礎資料の研究

(1) 絵巻資料

梅津次郎氏収集絵巻資料の目録については「梅津次郎氏撮影作品リスト（稿）」を『美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用』（科学研究費補助金―総合研究A―研究成果報告書）に発表してあるが本研究の最終年度にあたる本年，その総リストの点検と，データベースの作成，資料写真の公開に向けた準備を行った。

その概要は以下の通りである。

ネガ本数	618	本
収録作品件数	1129	件

今回作成されたデータベースは，絵巻研究文献データベース・絵巻作品複製データベースと統合され，絵巻研究資料データベースとして本研究所の共有化環境の中で試用される。

＜（情）米倉，（調）佐野，（研究協力）村重寧，大西昌子，千野香織＞

(2) 関東水墨画資料

下記の美術館・博物館に於て，室町水墨画及び関連作品の調査を実施した。

雪舟流の画家の作品	山口県立美術館
寒山拾得図	栃木県立博物館

収集資料については，逐次整理を行い，併せてデータベース化を進めた。

13世紀より16世紀における水墨画家（約60名）に関しての基礎資料の収集と研究史の整理は，相阿弥・小栗宗湛について研究会を行い，また室町時代における画僧の位置づけと五山文学の実景図関係史料についても検討を加えた。

＜島尾，（情）井手，（研究協力）河合正朝，横田忠司，相沢正彦，大石利雄，山下裕二，小川知二，大西薫，救仁郷秀明＞

(3) 近代美術史料

1）展覧会出品目録の整理

前年度データベース化を完了した明治美術会，白馬会，日本絵画協会など明治期の5美術団体出品目録を『明治期美術展覧会出品目録』（東京国立文化財研究所編中央公論美術出版刊）として刊行した。ウィーン万国博覧会については，出品目録をデータベース化するとともに「美術研究」357-359に復刻した（横溝広子との共同研究）。また，日本美術協会出品目録のデータベース化を行い，そのなかで皇室買い上げ，献上品の目録を作成した。

2）博覧会関係史料の調査

明治初期に行われた万国博覧会，内国勧業博覧会関係史料として東京国立博物館蔵「温知図録」の調査を行い，数千におよぶ写真撮影とその整理を行った。

3）美術史学関係資料の収集

前年に引き続き日本美術史通史の刊行書，海外との人物交流調査のための刊行書の収集を行った。

<三輪，佐藤，山梨>

(4) 日本絵画史年紀資料集成十五世紀

昨年度までに源豊宗編『日本美術年表』・集英社版『原色日本美術年表』に掲出された1401～1500年の記事の中から絵画に関する項目約140件を抜粋した。落款，奥書，賛文，銘記などに年紀をもつ例の他，作者，賛者の没年等から制作年代の推定できる例も参考資料として同様に抜粋し，基礎データとした。

今年度は，抜粋項目に取り上げた作例１点ごとについて，論文・論説・紹介など，内容と図版の有無を基準にした主要参考文献の収集を継続しながら，銘記等の釈文の作業を開始した。

<（情）鈴木>

3．中国仏教美術基準作品調査研究（６年計画の第２年次）

本研究は，中国仏教美術作品のうち，銘記，落款，印章，賛文等によって，制作年，制作地，作者，発願者などが明らかなものを「基準作品」として調査し，基本的なデータや詳細な写真を整備することによって，中国仏教美術の大系を見直し，その特質を明らかにするための「ものさし」を作ろうとするものである。

(1) 研究会（研究協力者会議）の開催

国内所在の中国仏教美術，また日本における中国仏教美術の受容の諸相について研究を重ねてきた研究者を招き，各自がもつデータを持ち寄り，問題の所在を明らかにするとともに，今後の調査研究の方法等について討議した。

本年度の研究発表者は次の６名である。

稲本泰生（京都大学人文科学研究所）

井手誠之輔（当研究所）

石松日奈子（恵泉女学園大学）

井筒信隆（高野山霊宝館）

調査研究

曽布川寛（京都大学人文科学研究所）

河田昌之（久保惣記念文化財団付属東洋美術研究所）

(2) 現地調査

年紀を有する中国仏教美術作品を中心に調査し，写真撮影を行った。本年度は，関西方面，九州方面で調査を実施した。

(3) 基礎資料の収集

既に国内の各機関，個人等に分散して蓄積されている中国仏教美術作品のデータ，写真等を借覧し，必要に応じてその複製を作るなどして，基礎資料の収集を行った。本年度は，アメリカ所在の中国仏教美術関連の資料を重点的に整備した。

〈中野，島尾，岡田，（情）米倉，井手，長岡，勝木〉

4．近百年中国絵画史研究

20世紀初期の中国における西洋画の受容を中心に研究を行い，その成果の一部を『美術研究』358，359号に発表した。また「近百年来中国美術年表」の作成を継続した。北京・徐悲鴻紀念館，梅蘭芳紀念館などで現代中国絵画の調査を行った。

〈鶴田〉

2．芸　能　部

(1) 概　　要

芸能部は，日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし，演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては，諸芸能の理念・構造・技法およびその継承保存に関する研究などがあり，その研究に必要な資料の収集・整備，および記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。研究の成果は，刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成５年度は，特別研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」（４年計

画）の第２年次にあたり，資料収集，記録作成，実地調査を行い，研究会を開催した。また一般研究「能楽の芸能学的調査研究」は，その第４年次にあたり，いくつかの角度からの調査研究を行った。

演劇研究室

日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い，また，これら諸芸能の周辺にあって，伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成５年度は，個人研究として「絵画資料による近世演劇の研究」「舞楽系芸能を伴う寺社行事の研究」，共同研究として「能楽の芸能学的調査研究」を行い，また共同研究「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」に参加した。さらに，歌舞伎演技術の継承法の調査・保存のために，中村歌右衛門指導の10月国立劇場公演の稽古を撮影した。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について，芸能学的・音楽学的な調査研究を行い，これら伝統芸能の成立に深い関係をもつ周辺分野についても，調査研究を進めている。

平成５年度は，個人研究として，「日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究」「伝統的唱歌の研究」「日本舞踊における技法の相互影響の研究」を行ったほか，共同研究「能楽の芸能学的調査研究」「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」に参加した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし，それらの保存・継承に資するために必要な研究を行っている。

平成５年度は，個人研究として「芸能に用いられる武器の研究」「鳥海山の番楽における舞と太鼓の研究」を行ったほか，共同研究「能楽の芸能学的調査研究」「伝統芸能における〈鬼〉の実証的研究」に参加した。

(2) 各　　論

1．伝統芸能における「鬼」の実証的研究（4年計画の第2年次）

日本の民俗行事や宗教行事，能･狂言･歌舞伎などの伝統芸能には，「鬼」がいろいろに形や性格を変えて登場する。本研究は，「鬼」の多面的な性格，芸能的表現の多様性，歴史的変遷を総合的に把握し，解明することを目的とする。本年度はその2年次で，下記の調査・研究を行った。

(1) 研究会開催；毎月1回実施し，特に美術部・情報資料部との共同研究会を3回行った。そのうち1回は大阪大学助教授小松和彦氏を招いて発表を聞き，質疑応答を行った。

(2) 実地調査；千葉県の鬼来迎，佐賀県の鬼祭を調査し，記録した。

(3) 個別研究；元禄期の江戸の歌舞伎に登場する鬼について調査し，その成果を「芸能の科学」22に公表した。

2．能楽の芸能学的調査研究（5年計画の第4年次）

舞台芸術としての能楽の技法を多角的に捉えることを目的とし，芸能部全員で取り組む総合研究である。今年度は下記の調査研究を行った。

(1) 能と狂言の「演出」の意義；戯曲論と技法論の明治以後の研究史，謡・囃子･所作の流儀差等について考察し，夏期学術講座で発表した。また，狂言の稀曲「唐人子宝」と能の番外曲「雪鬼」について諸本を検討し，国立能楽堂の研究公演に協力した。〈羽田〉

(2) 能の音楽的研究；春日神社（山形県櫛引町）の例大祭における黒川能の奏演を調査し，記録した。〈蒲生〉

(3) 鼓胴の変遷の研究；能の鼓胴の変遷をたどり，科学研究費の交付を受けて行っている「雅楽古楽器の総合的調査研究」において，その前身と思われる雅楽の鼓胴について他の分担者とともに調査を行った。〈高桑〉

(4) 民俗芸能にみる狂言様式の研究；民俗芸能の狂言的要素をその機能によって「もどく芸」と「つなぐ芸」に分類し，「もどく芸」の事例として静岡県森町の山名神社舞楽の調査研究を行い，その成果を「芸能史研究」124に公表した。なお，この研究は科学研究費による研究の一部をなす。〈中村〉

(5) 近世演劇と能の関係；能の摂取に熱心であった初代市川団十郎と中村七三郎の調査に着手，二人の摂取の仕方について比較中である。〈鎌倉〉

3．絵画資料による近世演劇の研究（3年計画の第3年次）

京都・江戸・大坂で同一の外題で上演された作品の絵入狂言本本文及び挿絵を比較検討し，三都の異同を考察した。〈鎌倉〉

4．日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究（5年計画の第5年次）

(1) 各種目に見られる旋律型の諸相を考察した。

(2) 「長滝の延年」の音楽と所作についての報告文をまとめ，「芸能の科学」22に公表した。

(3) 所外の研究者をまじえての，長唄正本研究を継続した。〈蒲生〉

5．伝統的唱歌の研究（3年計画の第1年次）

能に対象をしぼり，流派による唱歌の異同や変遷から囃子事の古態を探る事を目的とする。今年度は室町末期から江戸初期に書かれた伝書や楽譜から，舞のオロシの発生に関する資料の収集と考察を行った。〈高桑〉

6．雅楽古楽器の総合的調査研究

伝存する雅楽古楽器，とくに鼓胴について，総合的な調査研究を行った。美術工芸史の専攻者を含む15名の共同研究で，科学研究費の交付を受けて実施する総合研究(A)であるが，研究代表者と分担者の1名は，当芸能部員である。〈蒲生，高桑〉

7．芸能に用いられる武器の研究（3年計画の第1年次）

芸能に用いられる「ほこ」について調査研究を行い，その成果を「芸能の科学」22に公表した。＜中村＞

8．舞楽系芸能を伴う寺社行事の研究

地方に伝播した舞楽の調査（天王寺系舞楽との関わり）を継続。本年度は静岡県森町小国神社・天宮神社の舞楽行事を調査し，両神社所蔵の記録類を，音楽・舞踊の実際面と併せて検討した。〈高橋〉

9．日本舞踊における技法の相互影響の研究

舞踊作品，清元「流星」について，各芸系による技法の変遷や伝承の背景を比較し考察した。成果は，公開学術講座および「芸能の科学」22に公表した。〈丸茂〉

10. 鳥海山の番楽における舞と太鼓の研究

秋田県鳥海町に伝わる番楽の獅子舞を取り上げ，獅子に対する信仰が舞の所作の成立にどのように影響したか，また舞と太鼓との関わりを考察して，その成果を「芸能の科学」22に公表した。<山本>

3．保存科学部

(1) 概　　要

文化財の材質・構造・技法および劣化機構の科学的研究ならびに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行い，これらを基礎として文化財保存の技術開発に関する研究を行っている。言い換えれば，文化財の自然科学的研究，文化財を資料とする科学技術史的研究，文化財保存のための科学技術の応用研究の3方面である。研究組織は化学研究室，物理研究室，生物研究室の3室からなり，研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」などに公表され，文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を化学的手法を用いて調査・研究している。X線分析法，光学的分析法，質量分析法などを用い，主として金属文化財に関する劣化，保存対策，材料産地の推定などの研究を進めている。また，文化財を取り巻く環境からの大気汚染，酸性雨などの影響について汚染度の測定，影響評価法の研究を行っている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を物理学的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質，構造の調査方法としてγ線・X線・赤外線などを用いている。また展示，収蔵，梱包などの文化財を

保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化，すなわち微生物や昆虫等による被害の実態を調査して，これらの加害生物がおよぼす劣化の原因と機構を明らかにし，加害生物の防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各　　論

1. 鉄器材質の歴史的変遷に関する研究　（3年計画の第3年次）

鉄資料の化学組成および鉛同位体比から鉄の産地や製法に関する研究を進めている。今年度は鉛同位体比の測定を行い，銅製品が示す値とは少し異なり，鉄資料独自の分布をすることがわかった。日本と中国では明らかに異なった値を示し，日本の中でも違う可能性がある。今後，日本，朝鮮半島，中国産の鉄資料が集り，分析数が増えれば産地推定の強力な方法となるであろう。またマンガンなどの元素濃度は古代鉄の製作された年代で変化する傾向があり，さらに検討をすすめている。〈平尾〉

2. 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発　（5年計画の第2年次：修復技術部と共同）

(1) 文化財におよぼす酸性雨の影響評価法の研究

酸性雨の影響を受けやすい大理石に着目し，酸性雨が文化財におよぼす影響度を簡易な方法で評価しようとしている。

均一な表面をもつ大理石テストピースは3ヵ月程度雨に晒すと容易に重量変化の測定ができることが前年度までにわかったので，今年度は降雨を1 mm毎に分取できる雨水採取器のロート内にテストピースを入れて降雨を採取し，1～8 mmまでの降雨中のCl^-，NO_3^-，SO_4^{2-}およびNa^+，NH_4^+，K^+，Ca^{2+}イオン濃度を測定し，溶出したCa^{2+}イオンと各陰イオン濃度との関係を比較検討した。

その結果，通常の雨水に含まれる陰イオン濃度は多くの場合初期降雨

に $NO_3^- > SO_4^{2-} > Cl^-$ の割合で集中し，同様に陽イオンは $Na^+ > NH_4^+$（検出されない場合もある）$> K^+ \pm Ca^{2+}$ であった。雨水からも Ca^{2+} が検出されたが，溶出 Ca^{2+} については，初期1 mm降雨中に全溶出量の約30%が溶出していた。雨水中の陰イオン濃度も初期1 mmに集中し，Ca^{2+} との関係は Cl^-，NO_3^-，SO_4^{2-} の個々の濃度でなく全 H^+ 濃度，即ちpHに依存する結果がえられた。大理石は雨水中の炭酸によっても溶解するが，酸性の雨で促進されていることがわかった。

この方法は個々の博物館などにおける酸性雨の影響評価法として簡便であるため他の地域において比較実験を継続し，暴露法，テストピースの取り扱い法など信頼性の向上を目的としたデータの収集を続けている。〈門倉〉

3．有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の研究　（6年計画の第5年次）

昨年度までの研究で，長波長側のピークを持つブラックライトを紫外線源とした絵絹の人工劣化により良好な結果が得られたので，紫外線強度，温湿度などを変化させ人工劣化を行なった。その結果，絹の劣化速度に対して，温湿度，積算照射時間などとの相関が見いだされた。特に湿度の影響が大きく，高湿度で劣化速度が著しく速くなった。さらに紫外線照射を断続すれば劣化速度が減少することや，染色した資料の方が染色していないものより有機ラジカル強度や破断強度の減少が小さく，染色により紫外線の影響を遮蔽する効果が認められたなど，絹の保存条件に関係した重要な研究成果が得られた。〈佐野〉

4．文化財施設内における保存展示条件の検討（8年計画の第5年次）

変色試験紙の変色速度については，従来言われている通り，湿度以上に温度の影響が大きく，試験中の温度を約20℃に保持できない場合，暴露時間を長くするなどの処置を要すること，また変色量に対して，試験液のろ紙上の濃度の影響が大きく，目視による判断に誤りを与えることがあることなどが明らかとなった。

アマニ油含浸ろ紙の変色については，黄色指数約30までの，初期の変色速度とesr信号強度との間に直線性がみとめられた。コンクリート暴露試

料で観測されたesr信号と熱分解生成物の信号は異なり，変色量だけでは両者の区別がつかなくても，機器分析と組み合わせれば分離が可能であることが明らかとなった。黄色指数が30超の褐色まで変色すると，各種分解生成物が複雑な反応を起こし，多種類のesrの信号が観測され，信号濃度との間に直線性がなくなり，環境試験のモニターには不適であることがわかった。〈佐野〉

5．文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 鉛同位体比を利用した銅製品，青銅製品の材料産地推定

文化庁，東京国立博物館，県や市町村の教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどが所蔵する，約100点の銅製品，発掘品などに関して鉛同位体比測定を行った。〈平尾〉

(2) 蛍光X線分析法を利用した研究

文化庁，東京国立博物館，県や市町村の教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどが所蔵する，約150点の銅製品，発掘品などに関して蛍光X線分析法による化学組成の測定を行った。〈平尾〉

(3) X線回折法を利用した研究

文化庁および島根県の教育委員会より，平成5年度から6年度にかけて，荒神谷遺跡出土青銅製遺物に発生している錆の結晶組成測定の依頼を受け，今年度は測定方法の検討および予備資料の測定として，約100点を測定した。殆どが孔雀石（マラカイト）であったが，なかには藍銅鉱（アズライト）や，白鉛鉱（セルーサイト）が検出される場合があった。〈平尾〉

(4) ICP発光分光分析法を利用した研究

文化庁および島根県の教育委員会より，平成5年度から6年度にかけて荒神谷遺跡出土青銅製遺物について，内部金属の化学組成を測定する依頼を受けた。今年度は銅剣35本，銅鐸4種，銅矛13本から資料を30～50mg採取し，そのうち銅剣15本，銅鐸4種について測定した。〈平尾〉

(5) 電子プローブマイクロアナライザーを用いた分析

ブリヂストン美術館所蔵の油画4点の白色下地材料の分析を行った。〈佐野〉

(6) 赤外線，エミシオグラフィ及びX線透視撮影による調査

下記の作品の撮影と調査を行った。〈三浦〉

漆製文化財

作品名	所蔵者（依頼者）
黒漆花円分螺鈿合子	浦添市美術館
朱漆寒山拾得螺鈿四方盆	同上
黒漆琴高仙人堆朱盆	同上
朱漆輪花盆	西大寺

絵画・顔料

作品名	所蔵者（依頼者）
俵屋宗達「源氏物語関屋澪標図屏風」	静嘉堂文庫美術館
速水御舟「女二題」	福島県立美術館
原田直次郎「花」	岐阜県立美術館

(7) フーリエ変換赤外分光分析による調査

寛永寺清水堂修理に際し黒色顔料の材質に関する在来仕様調査を引続き行っている。〈佐野〉

(8) レーザー顕微鏡を用いた調査

修理に際して剥落した試料片に対し，各時代・各地方の下地との粉材料の粒度について調査を継続中である。〈佐野〉

(9) 漆文化財

中国福州市で行われたISOL'93に参加し，漆の科学的研究に関する世界の動向を調査した。〈佐野〉

(10) 文化財の材質の劣化

1) 走査電子顕微鏡による調査

博物館等館内の壁紙に発生した黒変に対し，生物由来であるか，ある特定の元素の沈着，化学変化により生じたものか等，原因の調査を行った。

また，収蔵施設等に収蔵された絵画に生じた変色の原因についても調査中である。〈佐野〉

2) その他

文書史料，特に近現代の史料に対して頻繁に行われているゼロックス等の複写による資料の劣化について，光化学，熱的影響等多方面から研究を継続中である。〈佐野〉

6. 環境に関する調査研究

(1) 温度・湿度・水分

次の地点で，温度・湿度などの気象観測を継続して行っている。

〈三浦〉

史跡等の名称	観測項目	観測開始時期
小高町薬師堂石仏	温湿度・表面温度	1985年12月
中尊寺金色堂	温湿度・変位・含水率	1986年3月
元箱根石仏群	温湿度・表面温度・日照 風向・風速・雨量	1991年6月
長谷寺大仏	温湿度・表面温度・日照 風向・風速	1992年12月

(2) 土中環境に関する調査研究

古墳石室など外界から遮断された土中環境に長期間埋蔵されていた遺物等が極めて良好な状態で出土する例が多い。未発掘古墳内の環境を調査し，発掘後の内部調査，公開などにおける保存条件を設定するためデータの収集を行っている。

1) 馬絹古墳横穴式石室（川崎市）の発掘および補強工事に伴う保存科学的調査・研究

馬絹古墳横穴式石室は昭和53年以来閉塞されていたが古墳の保存整備に当たり再び開口され，石室内部の調査，補強工事が行われ再閉鎖された。一連の作業に当たり保存科学上の調査，環境管理を行った。

石室内部は昭和53年の発掘時に16℃，94％R.H.（外気＝7～10℃，74％）を得ていたので，これを参考に開口，補強工事伴う人の出入りを考慮して内部の温湿度16～20℃，95％R.H.以上を維持するよう，内部に温湿度計を設置して監視した。

開口時の保存科学上の所見は，玄室の北東角壁下床面に白色粘土の剝落が僅かにみられた。また，石材表面に植物の毛根が認められたが

昭和53年の調査時に比べて顕著な増殖は示していなかった。他に直接石材に加害するカビは確認されず，石室内は安定した状態であったと判断された。

補強工事作業のための石室の開口期間は5月8日～6月4日で，この間，石室上部に覆屋を設け，必要以外は発砲スチロール板で石室開口部を閉鎖して内部環境の安定化に努めた。作業期間中の外気温の最高値は28.0℃，湿度の最低値は23%R.H.，石室内の温度は15.2～19.2℃，最低湿度は83%で安定した環境で作業が行われた。補強工事終了後は殺菌処理を施し再び埋め戻された。〈門倉〉

2) 虎塚古墳石室公開に伴う保存科学上の調査研究

虎塚古墳石室は発掘（昭和48／8）以来，外気および石室内温湿度の測定を継続し石室内環境を監視している。春秋の年2回一般公開が行われている。公開の前後にデータの解析，壁画，公開施設の点検，公開が石室内環境におよぼす影響など保存科学上のデータ収集を行った。本年度の公開は4月2日～4日，4月9日～12日および10月24日～10月31日，11月3日～11月7日で，春期が合計2,491人，秋期が3,467人の見学者が訪れた。春期の公開期間中石室内温度は16.5～17.5℃，湿度ほぼ100%を維持し，石室内部への影響は認められなかった。〈門倉〉

3) 高松塚古墳内の糸状菌のモニタリング

高松塚古墳においては，発掘以来継続的に定期調査が行われている。

本年度も観測定点の糸状菌の調査を行った結果，いくつかの定点より Penicillium sp.が主要な糸状菌として検出された。現段階では，大きな被害はみられないが，今後も観察を続行し，パラホルムアルデヒド以外の薬剤も検討していく予定である。〈木川〉

(3) 美術館・博物館等館内環境調査について

1) 国宝・重要文化財等の指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用展示に関して館内環境調査を行い，報告書を作成提出した。

岩手県　　盛岡市中央公民館

宮城県　＊　多賀城市埋蔵文化財調査センター

埼玉県　　宮代町郷土資料館

千葉県　　松戸市立博物館
東京都　＊＋日野市ふるさと博物館
　　＊　新宿区立歴史博物館
　　東京都江戸東京博物館
愛知県　　刈谷市美術館
　　＊　清洲貝殻山貝塚資料館
岐阜県　＊＋飛騨の木樵館
三重県　＊＋四日市市立博物館
滋賀　　秦荘町歴史文化資料館
京都府　　大山崎町歴史資料館
大阪府　　大阪狭山市立郷土歴史館
　　大阪府立近つ飛鳥資料館
兵庫県　＊　芦屋市立美術博物館
　　財団法人柿衞文庫
　　＊　丹波古陶館
広島　　＊　三原リージョンプラザ

無印　指定品
＊　東京国立博物館収蔵資料で指定品でないもの
＋　限定なしの報告書

現地調査は大山崎町歴史資料館，大阪狭山市立郷土資料館，江戸東京博物館，日野市立ふるさと博物館，大阪府立近つ飛鳥資料館の５館のみ。

また，下記の全国125館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け，助言を行った。〈三浦・佐野〉

北海道　旭川市立博物館
青森　　八戸市博物館
岩手　　盛岡市中央公民館郷土資料展示室
宮城　　多賀城市埋蔵文化財調査センター
　　村田町教育委員会　　東北陶磁文化館
山形　　山寺芭蕉記念館　　最上義光歴史館　　天童市美術館
栃木　　足利市立美術館　　ミュージアム氏家

調査研究

群馬　榛東村耳飾り館　高崎市美術館　富岡市美術館博物館
玉村町文化センター歴史資料展示室
群馬県埋蔵文化財調査センター

埼玉　浦和市立郷土博物館　宮代町郷土資料館

千葉　松戸市立博物館　千葉市美術館開設準備室
佐倉市民ギャラリー開設準備室　戸定歴史館
袖ヶ浦市立郷土博物館

東京　(財)麻布美術工芸館　日野市ふるさと博物館
宮内庁三の丸尚蔵館　江戸東京博物館　東京美術倶楽部
新宿区立新宿歴史博物館　日本民芸館　(財)三菱資料館
真如苑宝物館　おもちゃの博物館　大倉集古館
東村山市教育委員会　目黒区立美術館

神奈川　神奈川県立公文書館　横浜人形の家　横浜市歴史博物館
箱根彫刻の森美術館　横浜市美術館
鎌倉市埋蔵文化財センター

新潟　新潟県立近代美術館

富山　高岡市新美術館　福岡町歴史民俗資料館

石川　七尾市アート館準備室　門前町北前船資料館

福井　高浜町郷土資料館　福井市教育委員会
大飯町立郷土史料館

長野　信濃美術館　下諏訪町立諏訪湖博物館　伊那文化館
マリーローランサン美術館　サンリツ服部美術館

岐阜　垂井町歴史文献資料館開設準備室　飛騨の木樵館

静岡　東海道広重美術館　久能山東照宮博物館　富士市博物館
三島大社宝物殿

愛知　やきものの里「高浜」コア施設　尾西市教育委員会
豊川地域文化広場ふるさと資料館　愛知芸術センター
愛知県清洲町貝殻山貝塚資料館　岡崎市美術館博物館
愛知県立美術館　豊田市美術館準備室　刈谷市美術館
古川美術館　愛知県陶磁資料館

三重　四日市市立博物館　松浦武四郎記念館
滋賀　秦荘町歴史文化資料館　ＭＩＨＯ美術館
京都　大山崎町歴史資料館　浄土院　勝竜寺城公園展示室
大阪　大阪府立近つ飛鳥博物館　吹田市立博物館
柏原市立歴史資料館　大阪狭山市立郷土資料館
サントリーミュージアム[天保山]　国立民族学博物館
兵庫　芦屋市立美術博物館　小野市立好古館　(財)柿衞文庫
龍野市立歴史文化資料館　丹波古陶館
太子町教育委員会　小磯記念美術館
奈良　五條市歴史資料館
和歌山　田辺市立美術館　和歌山県立博物館
鳥取　島根県立埋蔵文化財センター
鳥取　因幡万葉歴史館
岡山　成羽町美術館
広島　広島市郷土資料館　原爆資料館　大田庄歴史館
筆の里工房　三原市リージョンプラザ
王舎城美術寶物館　宮島町歴史民俗資料館
山口　徳山市美術博物館準備室　岩国市資料館　(財)吉川報效会
徳島　徳島城博物館
香川　香川県立文書館　牟礼町石の民俗資料館
愛媛　愛媛県歴史文化博物館
高知　高知県立美術館
長崎　ハウステンボス美術館
佐賀　唐津市近代図書館
熊本　熊本県立美術館　玉名市立博物館
大分　大分市歴史資料館　杵築市歴史資料館
宮崎　宮崎県立美術館　西都市歴史民俗資料館
鹿児島　鹿屋航空基地史料館

2)　博物館館内環境に関し，収蔵資料の材質や温湿度設定条件等についてアンケート方式で情報を収集している。そのうち，著しく不良と考

えられる状況については，改善のための助言を行った。〈佐野〉

3) 緊急災害時の館内環境として，消火剤の材質への影響の検討を始めている。初年度の今年は，特定フロンとして1994年１月より生産中止となるハロン消火剤に代る消火剤として使用される可能性のあるものにはどんなものがあるか，消防庁消防研究所等との交流を通して情報を収集した。〈佐野〉

4) アマニ油試験紙の黄色指数の測定に関して従来のカラーメーターに加え，分光スペクトル型のカラーメーターおよび携帯型のカラーメーターの３機種間の数値校正を行った。〈佐野〉

5) 館内環境について，人を発生源とするアンモニアの文化財材質への影響を調査した。絵画材料の緑青に対する化学変化を，電子スピン共鳴法で検出し，変色の可能性があることが明らかになった。〈佐野〉

7. 生物劣化に関する調査・研究

(1) 生物劣化の調査および防除対策

静岡県埋蔵文化財調査研究所における出土木材のＰＥＧ含浸処理中に，微生物が発生したため，調査を行った。ＰＥＧ溶液の腐敗の主因は，主にグラム陰性の擬球あるいは桿菌に由来した。溶液界面の皮膜からは，クラドスポリウム属のカビが検出された。腐敗の主因となった微生物が好気性と考えられたので，溶液界面をビニルシートで覆い，酸素を遮断した結果，良好な結果が得られた。また，２種類の防菌剤（イソチアゾロン，ベンズイソチアゾロン）の効果を調べたところ，どちらも分離菌に有効な防菌効果を示した。〈木川〉

(2) 美術館，博物館における燻蒸方法についてのアンケート調査

平成５年度の保存担当学芸員研修において，全国22の美術館，博物館，資料館の学芸員に燻蒸方法に関するアンケートを実施した。この調査で，ハロンの使用撤廃のために，文化財の燻蒸ガスとして長らく使用されてきたエキボン（臭化メチルと酸化エチレンの混合ガス）が数年内に使用できなくなることが念頭され，代替策の導入に先立ち現状調査を行うことを目的とした。以下に主な結果をまとめた。

1) 50％の館が１年に１回の頻度で燻蒸を行っていたが，その他は２

～5年に1回または，収蔵庫に入庫するもののみについて行っていた。

2) 燻蒸を行う時期は，1年を通じて分散しており，季節による虫の活動周期を考慮しているところは少なかった。

3) ガス抜きを含めた燻蒸期間は，4～6日が30%以上，1週間以上が40%であり，人体に対する安全性を考慮している館が多いことがわかった。

4) 欧米で試行されている低酸素濃度処理による殺虫法には，2週間以上の処理期間が必要であるが，2週間程度の処理期間は可能かどうかとの問に，20%が可能，40%がなんとか対処可能，30%弱が不可能との解答であった。

5) 収蔵品を材質ごとに分類し，それぞれに適した方法で防虫・防カビ対策を行うことは，可能と考えた館が20%弱，なんとか対処可能との回答が50%以上，不可能が20%弱であった。

6) 臭化メチルの使用規制については，知らない館が70%以上であった。これに対し，臭化メチルのオゾン層への害や，人体への毒性については，それぞれ40%，80%の館が知っていた。

以上の調査は，比較的大きな22の美術館，博物館，資料館に対して行ったものであり，かつその80%が都市部の館であることもあり，データの片寄りを考慮する必要があるが，定期的な清掃と生物被害の点検作業を行うことで，燻蒸の頻度を減らせる可能性があること，処理期間の面だけに関して言えば，低酸素濃度処理法なども一部の文化財に対しては導入され得ること，などが今後の方向として議論された。〈木川〉

(3) バナプレートの人体に対する安全性の確認

収蔵庫にバナプレート（DDVP（ジクロルボス）蒸散剤）を常用している博物館において，頭痛や不快感などの人体への影響が懸念されていた。これに対し，文献資料および該当博物館により実施された薬剤濃度の実例データより必要な情報を整理し，薬剤使用上の留意点の報告を行った。その中で，薬剤交換ののちしばらくの期間は，ジクロルボスの室内ガス濃度が労働許容濃度を超えており，入室を控えたほうがよいこ

とが確認された。〈木川〉

4．修復技術部

(1) 概　　要

文化財の修復に関する調査研究，科学的修復方法の開発研究，応用およびその公表を主務としている。研究の対象は美術工芸品，建造物，考古資料，民俗資料等の有形文化財をはじめとした，文化財すべてを含んでいる。

組織としては，文化財を構成する主材料に合わせて3研究室からなっている。

第一修復技術研究室

工芸品，建造物など木材および漆を主な材質とする文化財の修復に関する科学的，技術的研究を行い，その成果の公表を行なっている。

第二修復技術研究室

紙と布を素材とする文化財の修復技術を研究している。

絵画・文書類の素材として，和紙，絹布，麻布，木綿布とそれらの繊維，顔料，染料，接着剤（膠，糊など）を対象とする。繊維の強度変化・変色などについての基礎的研究と，紙・布としての劣化要因探求により，修復技術開発に資する。現代の修復技術に不可欠な合成樹脂その他の新素材も，文化財修復の観点から検討する。平成元年度から始まった「在外日本美術品の修復協力」には，修復技術専門家の立場から修復全般に関わると同時に，平成4年度からは，「紙の保存修復」国際研修をも担当している。

第三修復技術研究室

建造物，考古試料，美術工芸品など金属，石材，その他無機材質を主材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的研究とその成果の公表を行なっ

ている。

(2) 各　　論

1．文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究（5年計画の第2年次，保存科学部と共同）

環境汚染によって文化財が影響を受けているが，関東における文化財集中地区である鎌倉市内4ヶ所（高徳院，円覚寺，八幡宮，史跡永福寺）に観測ステーションを設置し，劣化因子の測定を行なうとともに大理石や銅版サンプル等の暴露試験を行なっている。鎌倉大仏の腐食状態の分析調査も行ない，海から飛来する塩の影響とみられる塩化銅や汚染環境下で生成されるといわれるアントレライトなどが検出された。〈青木，川野邊，三浦，門倉〉

2．文化財の伝統的修復材料の研究（第2期，3年計画の第1年次）

(1) 密陀絵について

密陀絵の文献は江戸時代の物は多数あるが，それらのほとんどは荏油に密陀僧を入れるという原則をでず，その分量はまちまちであり，また様々な添加剤が記載されているが，秘伝に近い物である。

密陀油に膠を混和する方法は，江戸時代の文献にはなく，明治時代の文献に一例だけ見られる。膠を入れることによって油の乾燥を促進する効果があるようだが，江戸時代の文献に記載がないのはこれが秘伝であるからと考えられる。

今回の実験は，これらの文献を参考に次のような点に注意しながら行った。①加熱時間をかえる，②膠の影響を見る，③密陀絵の影響をみるである。密陀絵の理想的な状態は素速く乾燥し，さらに塗膜が充分光沢があるものと考えているが，この実験の結論から言うと理想にほど遠いものである。〈中里〉

3．文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 紙質文化財

科学研究総合A，古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変

遷に関する基礎研究の研究分担者として，東大寺文書，東寺百合文書など作成当初のまま保存されている中世文書料紙の材質調査を行った。経年による変色が異常に少ない文書，原料の切断が顕著に見られる文書などが，製紙技術上，また保存性の観点から興味が持たれている。〈増田〉

4．材質の劣化に関する研究

(1) 木造文化財

a.京都・待庵の壁に変形がみられるために非破壊的な調査法の検討を行なった。赤外線と可視光による三次元測定とX線写真による劣化診断を行なうこととなった。〈川野邊〉

b.広島県厳島神社の高舞台の劣化調査を行ない，漆材料の改質を検討した。〈川野邊〉

(2) 染織文化財・染料

a.鉄タンニンによる繊維製品の劣化

脆弱化が速い黒染め染織品の修復法を確立するため，染色に利用される鉄の移動を追跡したところ，繊維上に測定される鉄分が多くても，その鉄が媒染剤によって化学的に安定している場合は劣化速度はそれほど速くないことが確認された。本研究は，絹の劣化に関する研究として保存科学部と共同研究をしている。また，文化財保護振興財団の研究補助金により，外部の研究者とも共同して行っている。〈増田，川野邊〉

5．文化財修復技術

(1) 漆文化財

輪王寺より依頼の李朝時代の黒漆塗の箱について調査を行い，破損している漆膜の処置について検討した。〈中里〉

木造建造物の各種外装用漆について劣化原因の追求と，合成漆試料を作成し屋外暴露実験を開始した。〈川野邊〉

(2) 紙質文化財

a)風邪引き紙の回復法

確実に風邪引き紙が回復する条件が，温湯浸漬と高湿度下乾燥であること，乾燥温度は影響がないことを確認した。〈増田〉

b)紙や絹に起こる緑青焼けは，それを防ぐ手立てがなく日本画を保存する上で問題になっている。炭酸カルシウムや炭酸マグネシウムを緑青焼けの裏面に塗布することによってその進行を防止する実験を行っているが，緑青焼けを防止するまでに至っていない。〈増田〉

(3) 金属文化財

象眼された遺物の錆をプラズマを利用して除去する方法を，昨年度に引続き埼玉県江南古墳出土太刀等に試み，プラズマ処理条件などの技術的改良を行なった。重要文化財群馬県観音山古墳出土金属製品の保存処理を文化庁の依頼で行なった。〈青木〉

(4) 遺跡・遺構の保存修復

発掘遺構を露出保存するためには，収縮や生物被害などを発生させないようにして土壌を強化しなければならない。昨年に引続き吉野里遺跡で浸透性を改良したポリシロキサンとアクリルポリオール樹脂を配合した樹脂が収縮防止性や強化能力に優れていることがわかった。〈青木〉

(5) 石造文化財の保存修復

石造文化財の修復の大きな問題として石材表面の層状剥離がある。そのまま放置しておけば表面が剥落してしまうので，剥離部分に樹脂を注入して剥離部分の接着を行なう必要がある。重要文化財香港上海銀行，重要文化財ニコライ堂の修理に際し，従来から使用されてきたエポキシ樹脂とポリシロキサンとアクリルポリオール樹脂を配合した樹脂の比較実験を行なった。剥離試験を行なった結果，浸透性および接着性の点で後者の樹脂の方が優れていた。また注入には亀裂などの目止めが必要であるが，良いシール剤がなかったので膠を利用したシール剤を開発した。〈青木〉

6．調査指導

(1) 正倉院伎楽面の修理

本年度は，破損がひどい木彫第55号（酔胡従）と乾漆第2号（呉公）が選ばれ，正倉院事務所の手で修理が行なわれたが，現品を前にして，技術的検討と指導を行なった。〈中里〉

(2) 山口県阿弥陀寺の折本装，大般若経(山口県指定文化財)が，集中豪雨

により土石流の下に約2週間埋もれ，発掘直後からカビの発生が見られたので，乾燥方法につき相談があった。早急な冷凍保存と冷凍のための包装方法を指示した。乾燥方法，修復処置に関しては平成6年度に検討，実施することとした。〈増田〉

(3) 史跡埼玉県南河原村石塔婆の修理委員会委員として，強化樹脂や技術的問題について指導した。〈青木〉

(4) 重要文化財八戸市是川遺跡出土遺物の修復にあたって使用樹脂の指導を行なった。〈青木〉

(5) 重要文化財宇都宮市清厳寺鉄塔婆の応急的防錆処置について指導を行なった。〈青木〉

(6) 国宝厳島神社大鳥居の根継部分の修理仕様を決定した。〈川野邊〉

(7) 国宝厳島神社能舞台及び高舞台の劣化調査を行ない，修復材料の検討・仕様決定を行なった。〈川野邊〉

(8) 国宝待庵の劣化状態の調査方法の指導を行なった。〈川野邊〉

7．受託研究

a.太宰府市大字観世音寺内出土の漆手箱復元に関する研究

観世音寺境内の木棺墓から出土した漆手箱は，素地が完全に腐朽して漆膜のみの状態で出土した。この漆手箱は周囲の土とともに木枠内に取り上げられているが，方形の箱の大きさが推測出来る状態にあった。箱の内容物はまだそのままになっており，湖州鏡等がX線透視写真によって確認されている。本研究は3年度計画でおこなわれる。今年度は，漆膜を完全に露出させるために，土砂の除去を行い，漆膜を取上げ別途保存し，内容物を取り出す予定であったが，漆膜の破損状態が予想外に悪かったため周囲の土を除去するにとどめた。〈中里・青木〉

b.袋井市石ノ形古墳出土金属製品の保存修復研究

5世紀後半の古墳から短甲，大刀，鉄斧，鉄地金銅張轡鏡板などが発掘された。発掘中からこれら金属製品の埋蔵環境を調査し，また脆弱な遺物に対する新しい取り上げ材料の使用実験を行った。研究所内では，さまざまな劣化状態や形状にある遺物のプラズマ処理条件を決めるための処理実験を中心に行った。〈青木〉

5．情報資料部

(1) 概　　要

情報資料部は，従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成，収集，整理，保管，閲覧等の業務を充実発展させ，さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され，文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ，学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため，データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究，画像処理技術の応用，文献データベースの開発などを行っている。

当部研究員は，上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌，美術部と共催の公開学術講座等で発表されている。

当部は，文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌，調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また，日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は『日本美術年鑑』に掲載し，一定期間ごとに総合・増補し『日本・東洋古美術文献目録』として刊行している。現在，昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作成，収集，整理，保管，閲覧を行うとともに，各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し，資料の充実につとめている。また，これに平行して，美術研究所創立以来蓄積された写真原板の転写を昨

年度に引続き実施するとともに，美術史研究への画像処理技術の応用及び画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

(2) 各　　論

1．美術情報処理システムの研究―データの共有化を中心として―(10年計画の第5年次)

(1) 共有データの生産・蓄積

1）文献，図書各データの蓄積を継続し，また売立目録データの入力をおこなっている。

2）画像データは，デジタル画像としてPhotoCDの試験板を作製し，その利用のための諸条件を検討した。また，アナログ画像としてレーザーディスクへの画像取り込みを継続した。

(2) パイロットシステムの構築

1）定期刊行物所載文献データベース及び所蔵図書データベース検索システムの運用・評価

日常業務の中で順調に運用中である。

2）画像データベース構築のための基礎実験

客員研究員の協力を得て，レーザーディスク，PhotoCDのマッキントッシュによる検索システムを試作した。

3）ローカルエリアネットワークシステムの整備・運用・評価

データ量の増大に伴い，旧機種を更新し作業効率を高めた。また，新たに3室へ端末を増設した。

4）オンラインデータ通信の有効利用

専用電話回線によるデータ通信を継続した。

(3) 「共有化」環境の検討

1）「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

特別研究「有形・無形文化財データベースシステムの構築に関する研究」の一環として「デジタル画像データ利用の現状と課題」をテーマに研究協議会(1994.3.17於東京国立文化財研究所，外部参加者16名)

を開催した。

2）文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

LANの拡充を図り，所内システム環境を整備しつつある。

(4) データの研究的利用法の検討—美術研究における「ことば」の問題の基礎的研究

1）美術記述における語彙の特性の分析基礎研究を開始した。

2）蓄積された語彙をもとにした検索ツールとしての利用法の検討

語彙の蓄積（文献からのキーワード）のみ継続した。

2．美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究（5年計画の第5年次）

(1) デジタル画像処理とパッケージソフトの開発

美術作品の分析に関する前年度までの実験結果を総括して，シミュレーション・多重表示・分析等のルーチーン化を試みるなど，画像の入力・処理・記録蓄積を一貫した作業のもとで可能にするパッケージソフトを完成した。

(2) 画像の蓄積とデータベースシステム

1）所蔵資料の画像データ蓄積（アナログ・データ）

前年度にひきつづき，科学研究費助成「有形文化財映像データベース」（代表者：東京国立博物館・高見沢明雄）に参加し，所蔵ガラス乾板（2,500枚）の画像をレーザーディスクに収めた。あわせて，タイトル・作者名・所蔵先などをデータベースとして，画像を検索できるようにした。

2）画像データの実験（デジタル・データ）

コンパクト・ディスクと同一規格のPhoto CD（静止画像100枚の記録可能）を実験的に作成し，画像の精度・色調，処理速度などの点から評価を試みた。

(3) 次年度以降の研究計画

デジタル画像の実用にむけた開発が活発となり，フィルムを中心とする画像資料をデジタル画像に置き換えていくための準備と実験をすすめる状況が整いつつある。デジタル画像を中心に計画を検討している。

3．日本・東洋美術史文献データベースの開発（6年計画の第6年次）

(1) データベースの作成

1）所蔵図書データベース

所蔵図書の書誌データベースを作成した。件数は約33,000件，サイズは約25メガバイトである。

2）研究文献データベースの作成

定期刊行物所載の日本東洋美術史文献データベースの作成を行った。対象は昭和41年から同60年に刊行された定期刊行物である。件数は約30,000件，サイズは約24メガバイトである。

(2) 文献データの共有化をめぐる諸問題の検討

1）上記データベースのそれぞれについて検索システムを作成，LAN上で運用し，複数の研究室での利用を可能とした。ローカルな環境における文献資料データの利用面については概ね評価できる。

2）冊子目録によるデータの公開については本データベースの出力で対応する見通しを立てた。

3）本研究で作成されたデータベースの美術史研究支援データベースへの統合は，長期研究計画の中で継続して研究する。

(3) 全文テキストデータベース

既存全文データファイルをLAN上で利用可能とした。

4．日本武装史研究

刀剣・甲冑・馬具・弓箭具などの武装研究は，従来，有職故実と作品研究が別々に行われているが，これを作品・故実・文献資料をあわせて行うものである。本年は猿投神社の刀装類の調査を行ったが，今後，絵巻物・屏風などの風俗画をも含めた研究を継続し，各時代の武装の実態を明らかにしていくものである。〈廣井〉

5．古代仏教彫刻史研究

平安時代初期木彫像研究を継続し，東寺聖僧文殊像，神護寺薬師如来像，福岡浮嶽神社木彫像三軀，大分奈多宮神像群等の調査をおこなった。うち，神護寺薬師如来像については，伝来，儀礼，安置空間とともに検討し，平安京守護を目的とした薬師悔過の本尊として造立されたとする試論を『美

術研究』359号に発表した。また，平成５年度文部省科学研究費一般研究(C)「メディアとしての請来美術研究」（研究代表者井手誠之輔）の助成をうけ，東寺兜跋毘沙門天像を中心に請来彫刻のメディアとしての機能を分析した。〈長岡〉

6．鎌倉時代絵画史の研究

鎌倉時代を中心とする作品の調査を継続。肖像画の分野では談山神社蔵藤原鎌足諸像，宝筐院蔵伝足利義詮像，称名寺蔵金沢四影などの調査を行った。義詮像については赤外TVによる詳細な調査を行ったが画讃部分の絹の損傷が激しくその解読には充分な成果をあげることができなかった。同時に本年は世俗人物肖像画制作における禁忌意識が単に呪詛に根づくものでない可能性について検討，またわが国の世俗人物肖像画の「かたち」につきまとう諸問題についても検討，その成果の一端を所内研究会，シンポジウムなどで発表した。主題としての人の問題は物語としての伝記に広がるが，法然伝絵・東征伝絵など高層伝記絵の調査も昨年に引続き継続した。

調査研究の経過で収録しえた資料記録類の機械可読データとしての蓄積もまた同時に進め，研究資料の共有化，有効利用の方法について検討を開始した。〈米倉〉

7．近世絵画史研究

平成５年度文部省科学研究費補助金一般研究（B）「画像と言語―東洋美術史における比較研究―」よる研究成果をまとめ，報告書を作成した。〈鈴木〉

8．請来仏画研究

平成５年度文部省科学研究費一般研究（C）「メディアとしての請来美術研究」（井手・長岡）の助成をうけ，請来画像のメディアとしての機能を分析するとともに，請来美術に関する基礎資料の収集を行った。また文部省在外研究員として，欧米各地の美術館（ギメ美術館，メトロポリタン美術館，ボストン美術館等）を訪問し，近代になって日本より流出した中国・朝鮮の仏画について調査するとともに，その一部を「宋代の阿弥陀画像」として報告した（美術部情報資料部研究会）。〈井手〉

9．中国における石窟美術の研究

中国の河北省・河南省・甘粛省・新疆ウイグル自治区の石窟寺院をたずね，阿弥陀図像を中心に調査を行った。その研究対象は絵画資料，なかでも壁画を主としつつ，同時に彫塑やその他の作例も比較考察の範疇とした。〈勝木〉

6．国際文化財保存修復協力室

(1) 概　　要

人類共通の遺産である文化財の保護のためには，国際的に交流や協力をはかることが必要である。そのためには，各国の実状についての理解が重要で，情報の収集が大切である。また，国際協力として最も大切なことは人材の養成で，研修事業がきわめて重要である。文化財保存修復技術の向上のための研究を推進して行くための国際共同研究も重要な事業である。そこで，国際貢献の一環として，わが国に文化財の保存，修復に関わる情報，研修，研究の国際協力センターを設立すべきとの声が高まっている。

国際文化財保存修復協力室は，センター設立に向けて，従来のアジア文化財保存研究室を拡充し平成5年4月に発足した。現在，協力室では世界各国，各地域の文化財とその保存に関する資料の収集，整理，データベースの作成を行っており，また，国際共同研究，国際会議・セミナーの企画，実行や諸外国の専門家の研修に関する仕事を行っている。さらに，基礎研究として，屋外の石造および木造文化財の劣化と保存処置に関する研究等を行っている。

(2) 各　　論

1．世界，特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集（5年計画の第3年次）

(1) 文化財の劣化状態および保存対策についての調査

1) アジア文化財保存セミナーにおいてカントリーレポートを行ったアジア各国の代表に，各国の最も代表的な文化財について，その保存状況と保存対策についてのアンケート調査を行い，多くの情報を得た。昨年度(第3回)までに得られた情報について項目別に整理，解析し，レポートにまとめた。<西浦>

2) 国内・外で開かれた国際的な会議，講演会，研究会等に積極的に参加し，多くの情報を得た。<西浦，松本，朽津>

(2) 組織，機構，プロジェクト等についての調査

1) アジア文化財保存セミナーにおいてカントリーレポートを行ったアジア各国の代表に，各国の文化財の保存に関わる組織，機構，プロジェクト等について，その現状と課題についてのアンケート調査を行い，多くの情報を得た。昨年度(第3回)までに得られた情報について項目別に整理，解析し，レポートにまとめた。<西浦>

2) 東京国立文化財研究所を訪れた諸外国の文化財保存関係者から個別に各国の状況を聞き取り，資料とした。

3) 文化財の保存，修復に関わる人材について情報を収集し，データベースを作成中である。<西浦>

4) 国内・外で開かれた国際的な会議，講演会，研究会等に積極的に参加し，多くの情報を得た。<西浦，松本，朽津>

2．屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究

(5年計画の第3年次)

(1) 石材の劣化現象についての岩石学，鉱物学的調査研究

1) 埼玉県深谷市の日本煉瓦工場より採集した，劣化したレンガ試料を岩石学的に研究した結果，レンガ試料においても，粘土鉱物の溶脱や，塩類の析出による脆弱化など，通常の岩石と同様なメカニズムで劣化が起きていることが確認された。<朽津>

2) タイ国石造遺跡において採集した石材を岩石学的に研究した結果，もともと風化した岩石を装飾用に用いている遺跡があることが判明した。<朽津>

3) 佐賀県鵜殿窟磨崖仏群の劣化状況を調査した結果，砂岩の粒子間を

埋めているセメント物質が溶け出すことによる岩石の凝集力の低下が起きていることが確認された。<朽津>

4) ブリュッセル市庁舎において，石像の劣化を観察した。その結果，この石像は砂質石灰岩でできており，方解石の部分が選択的に溶解するために石材が脆弱化し，崩落が起きていることが判明した。<朽津>

5) ブルージュ救世主大聖堂において，煉瓦の劣化現象を観察した。その結果，ここではもともと方解石を含んだ特殊な煉瓦が使われており，それが雨水等と反応することによって石膏を形成し，煉瓦の劣化を生んでいることが判明した。<朽津>

6) 細かい結晶粒子を吹き付けることによって，建造物等の石材をクリーニングする方法の有効性について，走査型電子顕微鏡等を用いて評価を行った。その結果，クリーニング法としては極めて有効であるものの，一部の粗粒石材に対しては，石材自体にまでダメージを与える恐れがあることが判明した。<朽津>

(2) 石材の保存材料に関する調査研究

1) 石材の強化および撥水処理に用いられる代表的なシリコーン樹脂について，その物性を比較検討するための実験を行っている。凝灰岩，砂岩，安山岩試験片を用いた浸透生測定，石粒を用いた強化力評価実験，処理石材の水蒸気透過性試験を行っており，特に，ヨーロッパで広く用いられているエチルシリケート系強化剤であるWacker OHと日本で多く用いられているメチルトリエトキシシラン系撥水強化剤であるSS-101との比較を行っている。<西浦>

2) 中国・楡林窟の保存対策に用いられている岩体強化剤としての珪酸カリウム水溶液の応用について現地調査を行った。<西浦，朽津>

3) 神奈川県，重文・元箱根石仏群の保存修復に関して，岩石の含浸強化処置，撥水処置についての現地調査を行い，また，樹脂の浸透性，撥水効果（地衣類防除効果）についての現地実験を行っている。<西浦>

(3) 洞窟，磨崖仏などの劣化現象と保存対策に関する調査研究

1) 福島県田村郡滝根町の大理石磨崖仏である入水三十三観音石仏のク

リーニングと強化，保存処置についての調査研究を行っている。第一番観音のみ独立丸彫りであるので，これを東文研に持ち込み，クリーニング（ゼリーパック）と保護（撥水性シラン樹脂含浸）処置を行った。現在，風雨に曝される元の場所に戻されており，今後定期的な観察を行う予定である。<西浦>

2) 福島県小高町，史跡・薬師堂石仏の劣化状態を定期的に調査しており，大屋根架設後の岩体の乾燥に伴う状態変化について，保存処置法を踏まえつつ，調査を行った。<西浦，朽津>

3) 埼玉県吉見百穴を調査し，主たる劣化原因となっている塩類風化について，実験を交えて考察を行った。その結果，塩類風化は，水・岩石の相互作用によって引き起こされるが，同じ岩石でも，そのおかれている環境によって晶出塩類も異なり，従って劣化状況も異なるということがわかった。<朽津>

4) シリア・アインダーラ遺跡の石彫像の劣化現象と保存，修復方法について調査を行い，基本的な保存方針，計画を提案した。<西浦，三輪>

5) 中国西北部を中心に多くの石窟を訪れ，劣化状況の調査を行った。<西浦，朽津，三輪>

6) スリランカ文化三角地帯の石（レンガ）造建造物遺跡および壁画について，その劣化状況と保存対策についての調査を行った。<西浦>

3．その他

(1) 古建築の保存を目的とした外装塗装（丹塗）の物性評価

木造古建築の丹塗り塗装の耐久性について，調査および実験的研究を行っている。新材料（合成樹脂）を含めた種々の材料について，さまざまな劣化促進処理による物性評価を進行中である。（科研・試験研究）<西浦>

(2) 大阪市立博物館所蔵のコプト石彫の劣化現象と保存修復処置の研究

イタリアから贈られた5世紀のものとされているコプト石彫が，収蔵庫での収蔵中に大量の塩が析出し，崩壊していく現象があり，これら石彫の劣化原因と保存修復方法について検討，考察中である。<西浦>

(3) 東アジア古代建築意匠とその源流についての研究

法隆寺建築の雲形斗栱に代表される装飾的建築細部の意匠的特質を考察し，これらの類例と考えられるもののうち，特に漢代石闕の斗栱表現と，高句麗壁画古墳に見られる雲文表現とに注目し，比較検討を行っている。今後，対象とすべき資料を地域的に拡大し，広くその系譜を解明していく予定である。<松本>

(4) 日本建築の疑似構造についての史的研究

日本建築についても既に古代から，実際に機能していない見えがかりの部材や空間が存在した。こうした部材の典型的な例である本蟇股の成立について考察すべく，資料を収集している。<松本>

(5) 石材の産地推定等の研究

1) 日本各地から出土した石器石材のうち，従来岩石名が不明とされていたものについて，その岩石組織を観察することによって，正確な岩石名を与えて分類を行った。また，岩石名を正確に命名するための基準を作成した。<朽津>

2) 香川県下の古墳の竪穴式石室に用いられている石材について，岩石組織に基づく原産地推定を行い，石材の流通について議論した。<朽津>

7．国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

1．中国における研究

(1) 第1次訪中

平成5年6月10(16)日～25日に下記の訪中団が敦煌およびその周辺地域を訪れ，日中共同で下記の調査，研究，協議を行った。

三輪　嘉六（修復技術部長）

増田　勝彦（修復技術部第二修復技術研究室長）

西浦　忠輝（国際文化財保存修復協力室長）

勝木言一郎（情報資料部文献資料研究室研究員）

朽津　信明（国際文化財保存修復協力室研究員）

吉澤富士夫（文化庁文化財保護部伝統文化課長）

1) 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度，湿度，日照，外部風速，内部微風速計測，積算日照計システムからのデータの読み出しと初期解析。

2) 53窟の壁画劣化状態の調査および写真撮影。

3) 顔料の変褪色についての科学分析結果についての研究協議とあらたな顔料の採取。

4) 10月に敦煌研究院で開かれる保存の国際シンポジウムに関する打ち合わせ。

5) 当面の研究の進め方および人物交流についての協議。

6) キジル千仏洞，クムトラ石窟，クズルガハ石窟等関連遺跡の調査。

(2) 第2次訪中

平成5年9月30日～10月12日に下記の訪中団が敦煌を訪れ，日中共同で下記の調査，協議を行った。

西川杏太郎（所長）

三浦　定俊（保存科学部長）

西浦　忠輝（国際文化財保存修復協力室長）

中野　照男（美術部第一研究室長）

尾立　和則（修復技術部第二修復技術研究室研究員）

勝木言一郎（情報資料部文献資料研究室研究員）

朽津　信明（国際文化財保存修復協力室研究員）

北野　　康（名古屋大学名誉教授）

1) 国際シンポジウム「Conservation of Ancient Sites on the Silk Road」における研究発表と討議。

2) 莫高窟の周辺地形の観察。

3) 楡林窟の劣化状態調査。

4) 当面の研究の進め方および人物交流についての協議。

5) 中国文物研究所およびゲティ保存研究所との研究協議

2．日本における研究協議または研修

(1) 平成5年10月20日～11月1日

段　　文傑（敦煌研究院長）

劉　　会林（敦煌研究院副院長）

劉　　永増（敦煌研究院資料センター次長）

目的：敦煌莫高窟の保存に関する共同研究協議等。

(2) 平成5年12月22日～平成6年3月21日

王　　旭東（敦煌研究院保護研究所研究実習員）

目的：環境調査方法に関する研修

3．第9回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

平成6年3月8日，協力会議委員，文化庁関係者，東文研関係者が出席して東文研において開催され，下記の議題について討議した。

1) 第8回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議議事録(案)について。

2) 平成5年度研究結果について。

3) 平成6年度研究計画(案)について。

4) 国際会議の平成7年度日本開催について

(2) スミソニアン研究機構との国際研究交流

科学研究費で「科学技術を利用した文化財研究法の開発」というテーマのもとで，青銅器，陶磁器，遺跡調査法の3つの研究課題の下に共同研究を進めている。5年度は日本側から，戸津圭之介（東京芸術大学），村上隆（奈良国立文化財研究所），平尾良光（東京国立文化財研究所）が訪米し，青銅器についての共同研究をアメリカ側研究者と行い，遺跡調査法については，西村康（奈良国立文化財研究所），亀井宏行（千葉大学），ディーン・　グッドマン（マイアミ大学中島分室）が渡米し，現地の遺跡探査を行った。また昨年に引き続き，中国社会科学院世界宗教研究所の金正耀氏がスミソニアンと東京国立文化財研究所で，中国の青銅器の鉛同位体分析を行った。

(3) 海外所在日本美術品調査

当研究所では，昭和63年以来，欧米所在の明治時代以前の日本美術作品に

関する基礎データの収集に努めてきた。平成２年度より，古文化財科学研究会が日本芸術文化振興会から助成金を得て「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」を行うことになり，当研究所がその委嘱を受けて調査研究を担当した。平成２年度のメトロポリタン美術館，３年度のバーク・コレクション，バーク・ファウンデーション，４年度のフィラデルフィア美術館の調査に引き続き，５年度はプライス・コレクション所蔵の作品の調査を行い，その成果として「海外所在日本美術品調査報告４　プライス・コレクション　絵画」を刊行した。

(4)　タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究

科学研究費国際学術研究海外学術調査により，昨年度から３ヶ年計画で調査研究を開始した。本年度は，１２月に西浦忠輝，三浦定俊，松本修自の３人がタイ国を訪れ，東北部のクメールの石(レンガ)造遺跡を中心に調査を行い，代表的な遺跡であるパノン・ルンおよびムアン・タムに環境計測システムを設置した。３月にタイ側研究者３名を招聘し，日本の保存研究状況を理解してもらうと同時に，具体的な研究の進め方について協議を行った。

(5)　文化財保護に関する日独学術交流

平成５年度から文部省科学研究費を受けて，「漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存」に関する研究が開始された。7月1日～11日に沢田正昭・工楽善通（以上奈良国立文化財研究所），三浦定俊・佐野千絵・尾立和則（以上東京国立文化財研究所），10月18日～25日に新井英夫(東京国立文化財研究所名誉研究員）が現地で調査と討議を行った。

また，11月8日～17日にドイツ側研究者３名が来日，漆に関する国際シンポジウムで研究発表と討議を行った。

8．主要研究業績

①：著書・編書　②：論文　③：解説　④研究発表
⑤：講演・放送　⑥：その他　　平成5.4～6.3

所　長

西川杏太郎

③　文化財と国際協力（慶應義塾大学での講演記録）　「三田評論」956　6．3
⑤　大和の仏から（特別展講演）　東京国立博物館　5．4.17
⑤　高僧の肖像彫刻（特別展講演）　奈良国立博物館　5．5.22
⑤　日本美術史～日本文化の特色（在外公館職員研修）
外務省研修所　5．4.19および5.10.20
⑤　伝統文化とわがまちの文化財（社会教育主事講習）
国立教育会館社会教育研修所　5．9.16
⑤　文化財保存のための伝統的な材料と技術（基調講演）
第4回アジア文化財保存セミナー　5.10.31
⑤　日本における漆及び漆芸品の保存（基調講演）
第17回国際研究集会「漆芸品の保存」　5.11.25

美術部

鶴田　武良（美術部長）

①　宋紫石と南蘋派　「日本の美術」326　至文堂　5．7
②　中国画研究院の10年と中国画壇の動向
「現代中国画の動向展」図録　日中友好会館美術館　5．9
②　聯幅の美－その歴史と鉄斎　「聯幅の美展」図録　鉄斎美術館　5.11
②　陶冷月について－近百年来中国絵画史研究三－　『美術研究』358　5.12
②　民国期中国における裸体画問題
第16回国際研究集会「東アジア美術における人のかたち」報告書　6．3
イメージリーディング叢書「人の〈かたち〉人の〈からだ〉」

平凡社　6．3

③　「中国年鑑1993年版」美術の項　中国研究所　5．6

③　中国画研究院紹介

「現代中国画の動向展」図録　日中友好会館美術館　5．9

③　作家略歴　「現代中国画の動向展」図録　日中友好会館美術館　5．9

③　楊渭泉の倣パピエ・コレ作品－民国期絵画資料　『美術研究』359　6．3

④　台湾における近代美術の発達

美術部・情報資料部公開学術講座　5.11

⑥　南方の清音－油画家劉啓祥（翻訳）

『台湾美術全集11・劉啓祥』　台北・芸術家出版社　5．5

⑥　北京故宮博物院歴代芸術名品の群（翻訳）　北京故宮博物院展図録　5．8

⑥　紫禁城と故宮博物院（翻訳）　北京故宮博物院展図録　5．8

⑥　故宮文物宝蔵新編・書道篇（監修）　台北・故宮博物院　5．6

⑥　故宮文物宝蔵新編・文具篇（監修）　台北・故宮博物院　5．7

⑥　故宮文物宝蔵新編・玉器篇（監修）　台北・故宮博物院　5.12

佐藤　道信（主任研究官）

①　河鍋暁斎と菊池容斎　日本の美術　325　至文堂　5．5

①　日本画の誕生（共著）　（日本の近代美術　2）　大月書店　5．6

②　渡辺省亭がなぜ欧米人に好まれたか

『クラクフ国立美術館』（秘蔵日本美術大観　10）　講談社　5．5

②　近代史学としての美術史学の成立と展開

『日本美術史の水脈』（辻惟雄先生還暦記念論文集）　ぺりかん社　5．6

②　暁斎芸術の二重構造　「暁斎」50　河鍋暁斎研究会　5．6

②　絵画と言語　(2)　雅号と理想の世界観　「美術研究」357　5．7

②　野間コレクションと大衆社会：時代史・個人史のタイムカプセル

「野間コレクションとその時代」展図録（新潟県立近代美術館）5．9

②　近代化が生んだ“歴史”と“歴史画”

ピロティ　89　（兵庫県立近代美術館）　5.10

②　歴史史料としてのコレクション　「近代画説」2　明治美術学会　5.12

調査研究

② 欧米所在の横山大観の作品について

『大英図書館，アシュモリアン美術館，ヴィクトリア・アルバート博物館』

（秘蔵日本美術大観　4）　講談社　6．2

② 欧米がひれ伏した“画鬼”河鍋暁斎　「芸術新潮」45-3　新潮社　6．2

② 人から人“間”へ一個としての人体

第16回国際研究集会「東アジア美術における人のかたち」報告書　6．3

イメージリーディング叢書「人の〈かたち〉人の〈からだ〉」

平凡社　6．3

③ 東京美術学校交友会誌とは　叢書案内　ゆまに書房　5．5

③ 美の倉（福田平八郎　雨）

「青淵」530　渋沢青淵記念財団　竜門社　5．6

③ 作品解説（狩野芳崖筆　悲母観音図）　「国華」1172　5．7

③ 展評（大正日本画の若き俊英たち　今村紫紅と赤曜会）

「BT」680　美術出版社　5.12

③ 作品解説

『大英図書館，アシュモリアン美術館，ヴィクトリア・アルバート博物館』

（秘蔵日本美術大観　4）　講談社　6．2

④ 歴史史料としてのコレクション　明治美術学会例会　5．4

⑤ 近代の日本画　New School　5．4

⑤ 原三渓と近代日本画　かながわ県民アカデミー　5．7

⑤ 野間清治とその時代　新潟県立近代美術館　5．9

⑤ 幕末・明治の歴史画　かながわ県民アカデミー　5.11

⑤ 日本画の美・野間コレクション　講談社　CATV　6．1

⑥ 河鍋暁斎の多面性に驚き（翻訳・原文ティモシー・クラーク）

朝日新聞　6．3

島尾　新（主任研究官）

② 天橋立図論の前提　『日本美術全集』第一三巻　講談社　5.10

② 雪舟と弟子たち　『室町時代の雪舟流』カタログ　山口県立美術館　5.10

② 「画題」について－日本絵画の題名－

『国立歴史民俗博物館研究報告集』第53集　5.11

② 柿本人麿像における「かたち」と「意味」
第16回国際研究集会「東アジア美術における人のかたち」報告書　6．3
イメージリーディング叢書「人の〈かたち〉人の〈からだ〉」
平凡社　6．3

③ 雪舟筆花鳥図屏風等解説　『日本美術全集』第一三巻　講談社　5.10

③ 拙宗筆山水図等解説　『正木美術館名品図録』　正木美術館　5.10

④ 日本美術における人のかたち　美術部・情報資料部研究会　5.11.17

④ かたちとことば　情報処理学会シンポジウム　日本学術会議　6．1.12

山梨絵美子（主任研究官）

③ 「ゆりの美術館」集英社　5．7

③ 日本美術院洋画部出品作家・作品解説　「大正の熱き風」展図録　6．1

③ 小山正太郎筆「秋景図」　「美術研究」357　5．7

③ 「黒田清輝日記」他9項目の解説
『日本現代文学大事典』（明治書院）　5.12

⑤ 日本近代美術史概説　メイプル・センター　5．4.10/17/24，5．8/15

⑤ 女性と美術「シカゴ万国博覧会女性館をめぐって」
三重県立美術館　5．9.25

⑤ 明治絵画と西洋絵画　学習院大学　5.12．2

⑥ ノーマン・ブライソン「日本近代洋画と性的枠組み」英文和訳
第16回国際研究集会「東アジア美術における人のかたち」報告書　6．3
イメージリーディング叢書「人の〈かたち〉人の〈からだ〉」
平凡社　6．3

⑥ 書評　粟津則雄「自画像は語る」　週刊ポスト　5．5.28

⑥ 書評　倉本四郎「フローラの肖像」　サピオ　5．9.23

中野　照男（第一研究室長）

② 垂迹曼荼羅における図像の借用と創造　「鹿島美術財団年報」10　5.11

④ 仏教説話図に表された鬼

調査研究

芸能部美術部情報資料部合同「鬼」研究会　5.10.28

⑤　二河白道図－浄土の希求－　四街道市消費者講座　5．7.20

岡田　健（第一研究室）

①　『仏像彫刻の鑑賞基礎知識』（光森，石松と共著）　至文堂　5.12

②　中国南北朝時代の如来像着衣の研究（下）（石松と共著）

「美術研究」357　5．7

②　アユタヤの仏教美術　「月刊文化財」363　5.12

④　中国・龍門石窟における「優塡王像」に関する研究

所内総合研究会　5．4．6

④　關於“優塡王像”的研究

龍門石窟千五百周年国際学術研討会（中国・河南省洛陽）　5．9．8

④　いわゆる邪鬼について

芸能部美術部情報資料部合同「鬼」研究会　5．9.21

⑥　龍門石窟一千五百周年に寄せて　「日中文化交流」525　5．8

三輪　英夫（第二研究室長）

①　小田野直武と秋田蘭画　日本の美術　327　至文堂　5．7

①　明治の洋画家たち（共著）　日本の近代美術　3　大月書店　5．7

③　日本洋画の二巨匠－黒田清輝と藤島武二

「黒田清輝と藤島武二展」図録　稲沢市荻須高徳記念美術館　5.10

③　描かれた明治のお姫様　学士会会報　802　6．1

⑤　黒田清輝－人と作品－　秋田市千秋美術館　5．7.24

⑤　黒田清輝とバルビゾン派（シンポジウム・バルビゾン派と日本）

山梨県立美術館　5.11

⑥　明治期美術展覧会出品目録（編集）　中央公論美術出版　6．3

芸　能　部

蒲生　郷昭（芸能部長）

①　文楽談義－語る・弾く・遣う（井野辺潔監修，執筆者８名）

創元社　5．8

② 延年の音楽（下）－長滝の場合－　「芸能の科学」22　6．3

② 能楽が近世芸能に及ぼした影響について－音楽面を中心に－

第15回国際シンポジウム報告書　6．3

② 長唄正本研究128～139（共同研究）　「邦楽と舞踊」514～525　5．4～6．3

⑤ 日本音楽に見られる旋律型の諸相

社団法人日本音響学会音楽音響研究会　5．9.25

⑥ 平成三年度の RILM 日本国内委員会の事業内容について

「東洋音楽研究」第57号　5．8

⑥ 平成四年度の RILM 日本国内委員会の事業内容について

「東洋音楽研究」第58号　5．8

⑥ 書評「宮城道雄随筆集　春の海」　「音楽芸術」9月号　5．9

⑥ 「法隆寺献納宝物＜楽器＞の楽器史的価値」

（上参郷祐康ほか4名と共同執筆）

「法隆寺献納宝物特別調査概報 XIV」　6．3

鎌倉　惠子（演劇研究室長）

② 江戸歌舞伎の鬼　ノート (1)　「芸能の科学」22　6．3

④ 浄瑠璃から歌舞伎へ　芸能部公開学術講座　5.10.25

⑥ 新刊紹介「近松浄瑠璃集　上」　「立教大学日本文学」第71号　5.12

高橋　美都（演劇研究室）

③ 舞楽の話　国立劇場第38回雅楽公演プログラム　6．2

③ 正倉院の楽器　宮内庁楽部特別鑑賞会プログラム　6．2

④ 寺社行事における鬼の芸能　日本記号学会大会　5．5

⑥ 雅楽概説　世田谷市民大学　5．9

⑥ 「法隆寺献納宝物＜楽器＞の楽器史的価値」

（上参郷祐康ほか4名と共同執筆）

「法隆寺献納宝物特別調査概報 XIV」　6．3

調査研究

羽田　昶（音楽舞踊研究室長）

②	「離見の見」について	「悲劇喜劇」5月号	5．5
②	能における「演出」をめぐって	第15回国際シンポジウム報告書	6．3
②	土岐善麿の能	「武蔵野日本文学」第3号	6．3
③	国立能楽堂の十年	「あぜくら」321号	5．8
③	堂本正樹の能界での仕事	『喝食抄－堂本正樹能劇評論集－』	5.11
④	能・狂言の演出と技法	芸能部夏期学術講座	5．7.12～ 7.15
④	シテ一人主義への変遷	大槻能楽堂	5.10.30
⑥	復曲能「実方」台本校訂	能劇の座第4回公演	5．6
⑥	書評「能の音楽性と実際」（浅見真高著）	「音楽芸術」10月号	5.10
⑥	狂言「唐人子宝」台本補綴	国立能楽堂狂言公演	5.11
⑥	復曲能「雪鬼」演出	国立能楽堂研究公演	5.12

高桑いづみ（音楽舞踊研究室）

②	独吟一管「海道下り」の復元	第15回国際シンポジウム報告書	6．3
⑤	上演曲目解説	国立能楽堂公開講座	6．1～ 3
⑥	「法隆寺献納宝物＜楽器＞の楽器史的価値」（上参郷祐康ほか4名と共同執筆）	「法隆寺献納宝物特別調査概報 XIV」	6．3

丸茂美恵子（音楽舞踊研究室）

②	日本舞踊における娘形作品の技法研究（31～34）	「季刊 舞踊研究」65～68	5．6～6．3
②	舞踊「流星」の演出における一考察	「芸能の科学」22	6．3
③	「賤の小田巻」ほか61曲	舞踊華扇会・春の会プログラム	5．5
③	「梅の栄」ほか17曲	関西舞踊華扇会プログラム	5．5
③	「鏡獅子」「かさね」	「カブキ101物語」	5．7
③	若柳流百年とその四代	若柳流舞踊公演プログラム	5．8
③	「北州」ほか59曲	舞踊華扇会プログラム	5．9
③	鐘を象徴する踊り	若柳寿延リサイタルプログラム	5.10

③ 「幻お七」ほか9曲　「至芸 伝統のきわみ」プログラム　5.11
③ 『どんつく』に登場する人々　国立劇場歌舞伎公演プログラム　5.12
⑤ 御注進のバリエーション　芸能部公開学術講座　5.10.25
⑥ 感動の彩り　「邦楽と舞踊」514～525　5．4～ 6．3
⑥ 伝統は新たな世紀へ（共同構成）　テレビ東京　5.11
⑥ 至芸　伝統のきわみ（共同構成）　テレビ東京　5.11

中村　茂子（民俗芸能研究室長）

② 静岡県森町の舞楽－山名神社の芸能について－　「芸能史研究」124　6．2
② 武器と芸能－その１－　「芸能の科学」22　6．3
② 佐渡の花笠踊考－橘法老氏の遺稿を中心に－　「越佐研究」51　6．3
⑤ 神楽と採り物－鉾を中心にして－
第7回出雲神話と神楽フォーラム　島根県大東町古代鉄歌謡館　6．2.27

山本　宏子（民俗芸能研究室）

② 秋田県鳥海町本海流獅子舞における舞と太鼓の関係
「芸能の科学」22　6．3
② 山口県油谷町楽踊りの継承　「民俗芸能」18　6．3
③ アジアの弦の響き　アジアフェスティバル　5．9
④ 八月踊りを携えて都市に移住した人々　民俗芸能学会　5.10
④ バリ島のガムランの演奏グループ「スカハ」の原理　東洋音楽学会　5.12．4
⑤ 世田谷の生活の歌　テレビ東京　6．2
⑥ バリ島のわらべうたを追いかけて　2～7
「スラット・バリ」14～19　5．5～6．3

保存科学部

三浦　定俊（保存科学部長）

① 第７章第８節　保存環境計測『美術工芸品の保存と保管』
田辺三郎助・登石健三監修　フジ・テクノシステム　pp.411-416　6．3
② 衛星画像を用いたアユタヤ遺跡調査（花泉，竹内と共著）

調査研究

「写真測量とリモートセンシング」32-4　pp.43-46　5．4

② 新設博物館・美術館等における保存環境の実際（佐野，石川と共著）

「月刊文化財」355　pp.34-42　5．4

② 文化財・考古学における光画像技術－総論

「O plus E」168　pp.69-74　5．9

② 敦煌周辺の天然水と中国の砂漠の折出塩の化学組成（北野，馬淵らと共著）

「保存科学」33　PP.1-26　6．3

② 敦煌莫高窟の気象(3) －敦煌地域の降水特性，特に莫高窟の保存に関わる大雨について－（高橋，藤田らと共著）

「保存科学」33　pp.27-34　6．3

② エミシオグラフィによる日本絵画の研究

「佛教芸術」213　pp.42-51　6．3

④ 衛星画像を用いたアユタヤ遺跡の保存状況調査（花泉，竹内と共同）

日本文化財科学会第10回大会　5．5.22

④ 敦煌莫高窟の気象　第15回古文化財科学研究会大会　5．6 .6

④ Emissiography of the silver inlaid sword excavated at Etafunayama Kofun, Prceedings of 15th RESES Symposium　5．8.27～29

④ Micro-Climate at Grottoes 53 and 194, Mogao（T.NISHIURA, ZHANG Y.らと共同） International Conference on the Conservation of Grotto Sites-Conservation of Ancient Sites on the Silk Road-

5.10．3 ～8

④ エックス線で考古学に挑む

第21回日本アイソトープ・放射線総合会議　6.2.2-4

⑤ 文化財の保存（環境）

指定文化財（美術工芸品）展示取り扱い講習会（東京）　5．7.13

同上　（京都）　5.11.30

⑥ 中国敦煌莫高窟壁画保存のための協力

「文化庁月報」302　pp.9-12　5.11

佐野　千絵（主任研究官）

② 新設博物館・美術館等における保存環境の実際（三浦，石川と共著）
「月刊文化財」355　pp.34-42　5．4

② 東大寺南大門仁王像吽形の修復材料の選定に関する基礎データ
（朽津，馬淵と共著）　「保存科学」33　pp.35-46　6．3

② 敦煌周辺の天然水と中国砂漠の折出塩の化学組成
（北野，馬淵らと共著）　「保存科学」33　pp.1-26　6．3

④ コンクリートから発生するアルカリ性物質について
－文化財材質への影響　第15回古文化財科学研究会大会　5．6

④ 鉄タンニン染織文化財の保存と劣化－染織材料の科学分析－
（川野辺らと共同）　第15回古文化財科学研究会大会　5．6

④ 鉄タンニン染め織り文化財の保存と劣化－耐光性の科学的評価－
（川野辺らと共同）　第15回古文化財科学研究会大会　5．6

⑤ 史料の保存　埼玉県地域史料保存活用連絡協議会　5.11

平尾　良光（化学研究室長）

② 考古学へのアイソトープ利用
「日本アイソトープ協会会誌」42　p.257-258　5．4

② 神奈川県今小路西遺跡から出土した銅製品（宋銭）の自然科学的調査
（平尾良光，瀬川富美子）
「神奈川県鎌倉市今小路西遺跡」p.76-98　5．7

② 戦国古銭的鉛同位体比値研究（金正耀，W.T.Chase，馬淵久夫，三輪嘉六，平尾良光，趙匡化，陳　栄，化覚明）　「文物」8 p.80-89　5．8

② 佐賀県唐津市久里大牟田遺跡から出土した鉛製矛の自然科学的研究
（平尾良光，榎本淳子）　「MUSEUM」　509 p.26-34　5．8

② 日本産標準岩石の鉛同位体比（松本哲一，平尾良光，富樫茂子）
「地質ニュース」44　p.649-657　5．9

② Stabilization of Archaeological iron, in「Current Problems in the Conservation of Metal Antiquities」(Shigeru Aoki, Yoshimitsu Hirao, Shoji Hirai and Harutoshi Kubota)

第13回国際研究集会 Proceedings　pp.91-99.　5.

② Chemical Composition of Corrosion Products on Bronze Objects, in 「Current Problems in the Conservation of Metal Antiquities」(Yoshimitsu Hirao, Shigeru Aoki, Shoji Hirai and Hisanobu Wakita)

第13回国際研究集会 Proceedings　pp.107-119.　5.

② カマン・カレホユックの第6次(1991)および第7次(1992)調査で出土した銅製品の鉛同位体比（平尾良光，榎本淳子）

「アナトリア考古学」3　pp.91-106　6. 3

④ 藤原宮跡から出土した鉛ガラスの自然科学的研究

（肥塚隆保，平尾良光）　日本文化財科学会第10回大会　5. 5.22

石川　陸郎（物理研究室）

② 新設博物館・美術館等における保存環境の実際（三浦，佐野と共著）

「月刊文化財」355　pp.34-42　5. 4

③ 法隆寺献納宝物　楽器X線投資写真資料

「法隆寺献納宝物特別調査概報」XIV　6. 3

門倉武夫（生物研究室長）

① 文化財への影響『酸性雨の科学と対策』

環境庁大気保全局大気規制課監修・溝口次夫編　p.271-288　6. 1

② 保存科学分析調査・保存整備調査

川崎市教育委員会「馬絹古墳保存整備・活用事業報告書」

p.75-79　6. 3

③ 酸性雨の被害は止められるだろうか

マナメッセ　9　p.23-24　6. 1 .1

④ 文化財に及ぼす酸性雨の影響評価法の検討(2)（宇田川と共同）

第15回古文化財科学研究会大会　5. 5.24

④ 文化財におよぼす酸性雨の影響に関する検討(2)

－酸性雨のよる大理石のリーチング試験－　第34回大気汚染学会　5.12.13

④ 文化財におよぼす酸性雨の影響に関する検討(1)

－酸性雨のよる大理石の溶解－（二宮と共同）

第34回大気汚染学会　5.12.19

⑤　文化財におよぼす空気汚染の影響　腐食防食93講演会　5. 5.27

⑤　中国のおける環境汚染と文化財　酸性雨調査研究会定期総会　5. 5.30

⑤　文化財の保存（劣化II　生物劣化）

指定文化財（美術工芸品）展示取り扱い講習会（東京）　5. 7.13

同上　（京都）　5.11.30

⑤　酸性雨（はてなサイエンス）　NHK 教育テレビ　5. 9.18

⑤　酸性雨から文化財を守る（日曜 TOP 情報）　フジテレビ　5.11.21

⑤　文化財の保存科学　明治大学博物館養成講座研修　5.12. 3

⑤　大気汚染と文化財に関する調査研究（特別講演・地球環境と文化財）

第34回大気汚染学会　5.12.13

⑤　酸性雨の影響（おはようトップ情報）　NHK 総合テレビ　6. 1.27

⑤　文化財と酸性雨（特別企画・酸性雨とその影響）

日本化学会第67回春季年会　6. 3.29

木川　りか（生物研究室）

①　分裂酵母の減数分裂（木川りか，山本正幸）『TRENDS IN MEDICAL SCIENCE 細胞増殖の制御 Signaling and Proliferation of the Cell』

高井義美・山本雅編　南江堂　p.246-254　5.10

②　出土木材 PEG 処理液の腐敗原因と防除対策

「保存科学」33　p.47-54　6. 3

③　脂肪酸研究会に参加して　「遺跡探査ニュースレター」7　p.3　5. 9

山野　勝次（生物研究室）

①　第７章第４節　昆虫『美術工芸品の保存と保管』

田辺三郎助・登石健三監修　フジ・テクノシステム　pp.363-373　6. 3

①　第７章第５節　防虫『同上』　pp.374-381　6. 3

②　水ガラスによる防蟻処理（第２報）

－イエシロアリに対する野外効力試験－（鈴木と共同）

調査研究

「しろあり」92　p.3-9　5．4

② 山口県上関町で発見されたアメリカカンザイシロアリ

「文化財の虫菌害」25　p.22-25　5．6

② 薬剤を使わないシロアリ防除法　「しろあり」93　p.14-23　5．7

② 木酢液の防蟻効力について　「しろあり」94　p.28-31　5.10

② 認定薬剤“リクタスーES”の防蟻効力試験

「文化財の虫菌害」26 p.3-11　5.12

③ 八丈島野外シロアリ試験地について　「しろあり」92　p.37-41　5．4

③ 建造物に大害をもたらあしたオオハナカミキリ

「家屋害虫だより」2　p.7-8　5．5

③ 家の中の害虫退治（シロアリの部）「Healthy TALK」92　p.2-7　5．5

③ 文化財の虫菌害防除法研究の動向

「文化財の虫菌害」25　p.3-7　5．6

③ これからのシロアリ防除　「家屋害虫だより」3　p.1　5.10

③ 巻頭言「これからの文化財虫害対策」「文化財の虫菌害」26　p.1-2　5.12

③ 燻蒸効果判定用昆虫テストサンプルについて

「文化財の虫菌害」26　p.33-36　5.12

③ 「第13回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会」報告

「文化財の虫菌害」26　p.47-49　5.12

⑤ 文化財の害虫と防除対策

第15回文化財の虫菌害保存対策研修会　(財)文化財虫害研究所　5．6.14

⑤ シロアリに関する実務的知識

平成5年度しろあり防除施工士資格第2次指定講習会

(社) 日本しろあり対策協会　5．9.10

⑤ 文化財虫菌害燻蒸処理仕様書ならびに危害防止措置規定について

第13回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会 (財)文化財虫害研究所　5．9.28

⑤ 昆虫学の基礎知識，昆虫による文化財の被害と防除，文化財の殺虫燻蒸

第15回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会

(財) 文化財虫害研究所　6．1.17

⑤ シロアリの生態と被害

平成６年度しろあり防除施工士資格第１次指定講習会
（社）日本しろあり対策協会　6．1.28

⑥ 訪問販売　「しろあり」93　p.41　5．7

新井　英夫（生物研究室）

① 『Biodeterioration of Cultural Property 2』(Editor:Toishi K.,Arai H., Kenjo T. & YAMANO K.),The Proceedings of 2nd Int.Conf. on Biodeterioration of Cultural Property(ICBCP-2),Yokohama, Oct.5-8,1992　5.12

① 第７章第３節カビ　『美術工芸品の保存と保管』田辺三郎助・登石健三監修
フジ・テクノシステム　p.349-362　6．3

② Relationship Between Fungi and Brown Spots Found in Various Materials『Biodeterioration of Cultural Property 2』p.320-336　5.12

② Screening of Defoxing Microorganisms and Their Enzyme（Matsuo M., Inoue C.らと共著）『Biodeterioration of Cultural Property 2』p.337-344
5.12

② On Propylene Oxide as a Fumigant　(Yamazaki M.,Yamano K.らと共著)『Biodeterioration of Cultural Property 2』p.415-424　5.12

② On the Mixed Fumigants Comprising of Propylene Oxide and Methyl Bromide(Kimura H.,Miyachi H.らと共著)『Biodeterioration of Cultural Property 2』p.425-433　5.12

③ 文化財の褐色斑点を追って　「日立」55(4)　5．4

③ 文化財生物劣化の国際会議を開催　Part 1（登石と共同）
「絲綢乃路」12　5．6

③ 同上　Part 2（登石と共同）
「絲綢乃路」13　5.10

⑤ 文化財の微生物被害と防除対策
第15回文化財虫菌害保存対策研修会　（財）文化財虫害研究所　5．6

⑤ 殺菌燻蒸と燻蒸剤の安全使用について
第13回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会

調査研究

（財）文化財虫害研究所　5．9

⑤　微生物による文化財の被害と防除，文化財の殺菌燻蒸
第15回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会
（財）文化財虫害研究所　6．1

修復技術部

三輪　嘉六（修復技術部長）

④　考古学からみた古代鉄　文化財保存修復研究協議会　5.10.15

中里　寿克（第一修復技術研究室長）

②　中尊寺経蔵露盤羽目板の修復処置　「保存科学」33号　6．3.31

③　中尊寺金色堂巻柱の漆芸技巧　『日本美術全集』第6巻　6．2.25

④　Traditional Japanese URUSHI Ware Techniques and their Restoration. The 17th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property　5.10．1

⑤　会津若松支援センター工芸短期研修　文様学III　5.12

⑤　劣化と保存 各論－漆－
博物館，美術館などの保存担当学芸員研修　5．7.27

増田　勝彦（第二修復技術研究室長）

②　紙文化財の補修について，科学研究報告
－各種セルロース材料による劣化紙の補強方法の開発－　6．3

③　ワシントン，フリーア美術館にある日本絵画を修理する，
特集・世界の文化財の保存修復協力　「文化庁月報」No.302　5.11

⑤　劣化と保存各論III－紙－
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修　5．7.28

⑤　修復材料 各論－伝統材料－
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修　5．7.21

⑤　史料の保存科学　国立史料館主催史料管理学研修　5．7.15～16

⑤　史料の保存科学

埼玉県文書館主催平成５年度文書史料取扱講習会　6．2．8

⑥　「紙の保存」国際研修 講師　5.11.24～5.12.14

尾立　和則（第二修復技術研究室）

⑤　劣化と保存各論 －絵画の彩色層－　保存担当学芸員研修　5．7.28

⑥　「紙の保存」国際研修 講師　5.11.24～5.12.14

青木　繁夫（第三修復技術研究室長）

②　象眼のクリーニングと砥出し

「江田船山古墳出土国宝銀象眼銘太刀」　5．3

④　鉄器の保存処理　文化財保存修復研究協議会　5.10.15

⑤　劣化と保存各論－金属製品－

博物館，美術館などの保存担当学芸員研修　5．7.21

⑤　考古資料の保存処理　埼玉県埋蔵文化財センター研修　5．8．5

⑤　考古資料の保存処理　千葉県文化財センター研修　5.11.16

⑤　考古資料におけるＸ線使用の歴史と問題点

日本原子力研究所研究協議会　6．2．3

情報資料部

廣井　雄一（情報資料部長）

①　『久能山東照宮傳世の文化財・刀剣編』　久能山東照宮　6．3

④　金工と鉄　文化財保存修復研究協議会「古代鉄の保存科学」

東京国立文化財研究所　5.10.15

⑤　奥州鍛冶と舞草刀　一関市文化会館　5．5.15

⑤　日本刀概論

文化庁・作刀技術研修会（島根県横町日刀保たたら）　5．9.30

井手誠之輔（主任研究官）

②　至元二十三年銘「阿弥陀如来図」の願文にみる阿弥陀浄土信仰

共同研究「高麗時代仏教絵画の総合的研究」（代表者，菊竹淳一）報告書

調査研究

『青丘学術論集』4　韓国文化研究振興財団　6．3

②　「シルクロードの失われた王国—カラホト請来の仏教美術—」展をみて

『デアルテ』10　九州藝術学会　6．3

③　「浄土五祖像」（二尊院）など解説２点

『日本美術全集』9（縁起絵と似絵）　講談社　5．8

④　宋代の阿弥陀画像　美術部・情報資料部研究会　6．1.26

⑥　翻訳　ヘルムート・ブリンカー著

「西洋の眼からみた東洋美術の人のかたち」

第16回国際研究集会「東アジアにおける〈人のかたち〉」報告書　6．3

イメージリーディング叢書「人の〈かたち〉人の〈からだ〉」

平凡社　6．3

米倉　迪夫（文献資料研究室長）

①　『日本美術全集』9（縁起絵と似絵）　講談社　5．8

②　鎌倉時代の絵画—物語と景観と人の絵画をめぐって—

『日本美術全集』9（縁起絵と似絵）　講談社　5．8

②　美術研究における情報の共有基盤を考える　『アートドキュメンテーション通信』　アートドキュメンテーション研究会　5.10

②　写実を拒むもの—世俗人物の遺像をめぐって

国際交流美術史研究会第12回シンポジアム（東洋美術における写実）報告書

国際交流美術史研究会　6．3

③　作品解説　『日本美術全集』9（縁起絵と似絵）　講談社　5．8

④　肖像画をはばかる　美術部・情報資料部研究会　5．4

④　写実を拒むもの—世俗人物の遺像をめぐって

国際交流東洋美術シンポジウム　5．7

④　人のかたち，鬼のかたち　芸能部研究会　5.11

⑤　鎌倉時代やまと絵の展開　東京国立博物館夏期講座　5．8

⑤　鎌倉時代の肖像画　金沢文庫講演会　6．2

勝木言一郎（文献資料研究室）

④　古代中国における〈極楽〉イメージの形成
美術部・情報資料部研究会　5．7.28

⑤　敦煌壁画における浄土変相について　東久留米市市民講座　5.12.12

鈴木　廣之（写真資料研究室長）

①　『狩野秀頼筆高雄観楓図屏風—記憶のかたち』（絵は語る 8）平凡社　6．2

②　瀟湘八景の受容と再生産—十五世紀を中心とした絵画の場—
『美術研究』358　5.12

②　絵とコトバ—正宗龍統の「屏風画の記」を中心に
平成四・五年度科学研究費補助金（一般研究Ｂ）「画像と言語—東洋美術史における比較研究—」研究成果報告書　6．3

②　屏風絵における“写実”—内膳本「豊国祭礼図」と中空の視覚—
『第12回国際シンポジアム・東洋美術における写実』報告書
国際交流美術史研究会　6．3

③　長沢蘆雪筆「龍虎図襖」ほか１点
『日本美術全集』19（大雅と応挙）　講談社　5．4

③　美術の本 600冊・入門者の基本型・桃山時代　『美術手帖』677　5.11

③　ディスプレイの文化史　『情報知識学会ニューズレター』23　5.12

③　総論・画像と言語—東洋美術史における比較研究—
平成四・五年度科学研究費補助金（一般研究Ｂ）「画像と言語—東洋美術史における比較研究—」研究成果報告書　6．3

④　16世紀の美術と環シナ海文化圏　美術部・情報資料部研究会　5．6.23

④　屏風絵における「写実」—その社会的役割と造形の問題—
国際交流美術史研究会第12回国際シンポジアム「東洋美術における写実」
5．7．8

④　桃山時代の美術と世界
学習院霞会館芸術講座「日本美術の内と外」（第５回）　5.11.11

④　15・6世紀における唐絵とやまと絵
美術部・情報資料部公開学術講座　5.11.19

調査研究

長岡　龍作（写真資料研究室）

② 美術史研究と画像情報　『人文学と情報処理』第3号　6．2

② 神護寺薬師如来像の位相―平安時代初期の山と薬師―

『美術研究』359　6．3

④ 「人のかたち」と「仏のかたち」の間―平安初期の山の像―

美術部・情報資料部研究会　6.10.20

⑥ 翻訳　サムエル・C・モース著

「救済への装い―十二・十三世紀の裸形像」

第16回国際研究集会「東アジア美術における人のかたち」報告書　6．3

イメージリーディング叢書「人の〈かたち〉人の〈からだ〉」

平凡社　6．3

国際文化財保存修復協力室

西浦　忠輝（国際文化財保存修復協力室長）

① 美術工芸品の保存と保管（第2章第8節，第4章第7節）

フジ・テクノシステム　6．3

① 海外文化財保存状態調査－報告書集(1)－〈石造遺跡1〉　東文研　6．3

② 敦煌莫高窟的気象観測[1]（1988年春的温湿度変化）（三浦らと共同）

「敦煌研究文集」石窟保存編・上　5．6

② 敦煌莫高窟的気候[2]（1989-1991）（三浦らと共同）

「敦煌研究文集」石窟保存編・上　5．6

② 用高模数珪酸鉀加固多孔，脆弱石質文物的進一歩研究（李と共同）

「敦煌研究文集」石窟保存編・下　5．6

② 敦煌壁画加固材料的選抜試験（李と共同）

「敦煌研究文集」石窟保存編・下　5．6

② 密閉空間に置かれた木材の温湿度変化にともなう伸縮と調湿剤の作用

（神庭と共同）　「古文化財の科学」37　5.12

② The current situation in Japan. The conservation of rock reliefs

Science and Technology for Cultural Heritage　5.12

② 入水三十三観音石仏の保存修復研究－大理石製石仏のクリーニングと保護処

置－（岡部らと共同）　「保存科学」33　6．3

② アジア諸国における文化財保存の現状－アンケート調査の結果と考察－（二神と共同）　「保存科学」33　6．3

② 敦煌周辺の天然水と中国の砂漠の析出塩の化学組成（北野らと共同）　「保存科学」33　6．3

③ イコモス総会・国際シンポジウムに参加して　イコモスニュース　5.11

④ Conservation of Rock Reliefs in Japan　シリア・アレッポ博物館　5．4

④ 石造文化財の保存処置に関する研究－シラン含浸処理石材からの水の蒸発と塩結晶化破壊－　第10回日本文化財科学会大会　5．5

④ 石材保存用樹脂の評価試験〔II〕強化用樹脂の浸透性(2)（北原らと共同）　第15回古文化財科学研究会大会　5．6

④ 大理石磨崖仏（入水三十三観音）の保存〔I〕-保存環境-（朽津らと共同）　第15回古文化財科学研究会大会　5．6

④ 大理石磨崖仏（入水三十三観音）の保存〔I〕-保存処理-（岡部らと共同）　第15回古文化財科学研究会講演会大会　5．6

④ Results of the Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage　第10回イコモス総会・国際シンポジウム　5．8

④ Micro-climate at Grottoes 53 and 194, Mogao（Miura らと共同）International Conference on the Conservation of Ancient Sites on the Silk Road　5.10

④ 敦煌莫高窟の保存－日中共同研究のあゆみと成果－　シルクロード・奈良国際シンポジウム'93　5.11

⑤ 劣化と保存各論－木－　博物館，美術館等保存担当学芸員研修　5．7

⑤ 劣化と保存各論－石－　博物館，美術館等保存担当学芸員研修　5．7

⑤ 文化財の科学的保存修復と新材料　東京農工大学集中講義〈博物館学〉　5．7

⑤ 文化財の保存（劣化III：木，金属，石の劣化）　指定文化財展示取扱講習会＜関東，関西＞　5.7.12

⑤ 石造文化財の劣化と保存　京都造形芸術大学特別講義　6．1

調査研究

⑤ 文化財修復国際協力　JICA 文化財修復整備技術コース　6．2

⑤ 敦煌莫高窟の保存(日中共同研究のあゆみと成果)　東文研総合研究会　6．2

⑥ 第4回アジア文化財保存セミナー会議録（松本らと共同）　6．3

松本　修自（主任研究官）

② 第36調査区の建物の復原　「布勢駅家」II　龍野市教育委員会　6．3

⑥ アンコール遺跡保存における技術的諸問題（伊藤延男氏の講演要約）
古文化財の科学通信52　6．2

⑥ 第4回アジア文化財保存セミナー会議録（西浦・木川と共同）　6．3

朽津　信明（国際文化財保存修復協力室）

② 敦煌莫高窟壁画的塩類風化（朽津・段）
「敦煌研究文集」石窟保存編・上　5．6

② 敦煌周辺の天然水と中国の砂漠の析出塩の化学組成（北野・馬淵・三浦・西浦・佐野・朽津・日下・段）　「保存科学」33　6．3

② 東大寺南大門仁王像吽形の修復材料選定に関する基礎データ
－木屎漆の木屎の調査および錆漆中の錆の調査－（佐野・朽津・馬淵）
「保存科学」33　6．3

② 入水三十三観音石仏の保存修復研究－大理石製石仏のクリーニングと保護処置－（西浦・岡部・朽津）　「保存科学」33　6．3

④ 敦煌莫高窟の地質環境II－蒸発岩の形成－（朽津・段）
日本地質学会第100年年会　5．4

④ 沙漠地域における文化財の保存－中国敦煌莫高窟の例－（朽津・段）
日本沙漠学会第4回学術大会　5．5

④ 古墳石材の岩石学的研究－香川県下の例－
日本文化財科学会第10回大会　5．5

④ 大理石磨崖仏（入水三十三観音）の保存〔Ⅰ〕-保存環境-
（朽津・萩谷・西浦）　第15回古文化財科学研究会大会　5．6

④ 大理石磨崖仏（入水三十三観音）の保存〔Ⅰ〕-保存処理-
（西浦・岡部・朽津）　第15回古文化財科学研究会講演会大会　5．6

④ Geological environment of the Mogao Grottoes. (Kuchitsu, Duan) Conservation of Ancient Sites on the Silk Road 5.10

④ Color change of pigments in the Mogao Grottoes. (Kuchitsu, Duan, Sano, Guo, Li) Conservation of Ancient Sites on the Silk Road 5.10

⑤ 劣化と保存　ガラス　博物館・美術館保存担当学芸員研修 5．7

⑥ 石造文化財の保存と修復（Eddy De Witte 氏の講演の要約）
古文化財の科学通信50 5．7

Ⅳ. 事　　業

1. 出　　版

(1) 美術研究

平成5年度は第357号から第359号が下記の内容で刊行された。

美術研究　第357号（平成5年7月）

中国南北朝時代の如来像着衣の研究（下）　岡田　健
石松日奈子

絵画と言語（二）雅号と理想の世界観　佐藤　道信

小山正太郎筆「秋景図」（図版解説）　山梨絵美子

ウィーン万国博覧会出品目録草稿（美術工芸編）（一）（研究資料）
横溝　廣子

美術研究　第358号（平成5年12月）

瀟湘八景の受容と再生産　－十五世紀を中心とした絵画の場－
鈴木　廣之

陶冷月について　－近百年来中国絵画史研究三－　鶴田　武良

ウィーン万国博覧会出品目録草稿（美術工芸編）（二）（研究資料）
横溝　廣子

美術研究　第359号（平成6年3月）

神護寺薬師如来像の位相　－平安時代初期の山と薬師－　長岡　龍作

楊渭泉の倣パピエ・コレ作品　－民国期絵画資料－（図版解説）
鶴田　武良

ウィーン万国博覧会出品目録草稿（美術工芸編）（三）（研究資料）
横溝　廣子

(2) 日本美術年鑑

平成５年版（平成６年３月発行）

平成４年の内容をもつ。Ｂ５版331頁。

平成４年の美術界年史

美術展覧会（現代美術・西洋美術）

美術展覧会（東洋古美術）

美術文献目録（定期刊行物所載）　（現代美術・西洋美術）

美術文献目録（定期刊行物所載）　（東洋古美術）

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文，調査報告，資料翻刻等を掲載している。平成５年度は下記の論考集を刊行した。

芸能の科学22（平成６年３月発行）

武器と芸能－その一－
　－採り物の「ほこ」と祭礼に出る「ほこ」－　中村　茂子

江戸歌舞伎の鬼　ノート　(1)　鎌倉　惠子

舞踊「流星」の演出における一考察
　－雷の仕分けをめぐって－　丸茂美惠子

延年の音楽（下）
　－長滝の場合－　蒲生　郷昭

秋田県鳥海町本海流獅子舞における舞と太鼓の関係　山本　宏子

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査，受託研究報告等の論文報告および修復処置等を掲載している。平成５年度は第33号を発行した。掲載論文は下記の通りである。

保存科学　第33号

敦煌周辺の天然水と中国の砂漠の析出塩の化学組成

北野　　康・馬淵　久夫・三浦　定俊・西浦　忠輝・佐野　千絵・

朽津　信明・門倉　武夫・日下部　実・段　　修業

敦煌莫高窟の気象(3)

－敦煌地域の降水特性，特に莫高窟の保存にかかわる大雨について－

高橋　英紀・藤田　創造・三浦　定俊・張　　拥軍・王　　宝義

東大寺南大門仁王像吽形の修復材料選定に関する基礎データ

－木屎漆中の木屎の調査および錆漆中の錆の調査－

佐野　千絵・朽津　信明・馬淵　久夫

出土木材ＰＥＧ処理液の腐敗原因と防除対策　　木川　りか

中尊寺経蔵露盤羽目板の修復処理（受託研究報告第66号）　　中里　壽克

入水三十三観音石補都県の保存修復研究

－大理石製石仏のクリーニングと保護処置－（受託研究報告第67号）

西浦　忠輝・岡部　昌子・朽津　信明

アジア諸国における文化財保存の現状－アンケート調査の結果と考察－

西浦　忠輝・二神　葉子

(5)　国際研究集会プロシーディングス

平成３年度

The 15th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property －Nō : Its Transmission and Regeneration－(1991)

「能の伝承と再生」を主題とした国際研究集会（３.10.29～31，芸能部担当）のプロシーディングス（和・英文）を，５年度に刊行した。集会では，能の伝承の諸相，能と現代芸術の交流，欧米における能の受容，復曲能の意義と活動などについて，有意義な発表と活発な討議が行われた。本プロシーディングスには，発表論文，総合討議のほか，集会の一部として行われた実演鑑賞のための講演などが含まれている。おもな内容は，下記のとおりである。

事　　業

【Keynote Lecture】

The Place of Nō in World Theater　James R. BRANDON

日本芸能の伝承と再生－能を中心として－　横道萬里雄

【Session I　Aspects of Nō in its Transmission】

Enacting Allusions : A Technique of the Nō Theater

Karen BRAZELL

世阿弥の身体　松岡　心平

能楽が近世芸能に及ぼした影響について－音楽面を中心に－　蒲生　郷昭

【Session II　Nō and Contemporary Performing Arts】

Song as a Nucleus of an Actor's Work on Stage

Jadowiga Maria RODOWICZ

室内歌劇「浅茅ケ宿」において試みたこと　増本伎共子

現代能『水の声』の試み－能と現代演劇－　岡本　章

Journey Performed : Theater of Nō Patterns

and a Prophetic Nordic Poem　Willie FLINDT

【Session III　Nō and the West】

Nō in English : Nō's Contemporaneity and Universality

Richard EMMERT

Some Notes on Memory and Recollection in Zeami Works

Stanca SCHOLZ-CIONCA

エズラ・パウンドの能『トリスタン』　成　惠卿

【Explication of "*Tadatsu no Saemon*"】

佯狂の祖型－『多度津左衛門』の演劇性－　堂本　正樹

【Session IV　Newly Revived Pieces】

能における「演出」をめぐって　羽田　昶

独吟一管「海道下り」の復元－能管と一節切の一交流－　高桑いづみ

復曲の意味　西野　春雄

【Discussion　I～III】

討論

事　　業

平成4年度

The 16th International Symposium on the Preservation of Cultural Property: Human Figure in the Visual Arts of East Asia (1992)

「東アジア美術における〈人のかたち〉」を主題とした美術部・情報資料部担当の国際研究集会（4.9.29～10.1）のプロシーディングス（和・英文）を刊行した。今回は，〈人のかたち〉の諸相，群像表現，人体表現における形と意味，裸体表現の諸問題の4つのサブテーマを設け，〈人のかたち〉に関わる様々な問題を追及した。本プロシーディングスには，発表論文，討議などが含まれる。主な内容は下記のとおりである。

基調講演

人の〈かたち〉と〈からだ〉　前川　誠郎

西洋の眼からみた東洋美術の人のかたち　ヘルムート・ブリンカー

I　〈人のかたち〉の諸相

人物画における聖と俗－宗教性と肖像性－　戸田　禎佑

人のかたちを神の領域へ－古代東アジア彫像の課題－　井上　正

〈唐子〉論－歴史としての子どもの身体をめぐって－　黒田日出男

日本近代洋画と性的枠組み　ノーマン・ブライソン

日本人の身体観　養老　孟司・布施　英利

II　群像表現

仏教絵画における群像表現　平田　寛

物語絵画における群像表現　佐野みどり

風俗画における群像表現－主題としての群衆－　奥平　俊六

討議一

III　人体表現における形と意味

救済への装い－十二・十三世紀の裸形像－　サムエル・C・モース

嫉妬のかたち－曾我蕭白の美人図をめぐって－　林　進

柿本人麿像における「かたち」と「意味」　島尾　新

－休をめぐって何が起ったか－肖像画における「破格」の問題－

大西　廣

討議二

事　　業

IV　裸体表現の諸問題

民国期中国における裸体画論争　鶴田　武良

韓国近代洋画における「裸体」　金　英那

日本美術に見る「はだか」　辻　惟雄

人から人”間”へ－個としての人体－　佐藤　道信

”極東ギリシア”の裸体画　丹尾　安典

「文明開化」のなかの裸体　北澤　憲昭

見世物のなかの〈人のかたち〉　木下　直之

討議三

2．黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は，黒田清輝の功績を記念し，併せて地方文化の振興に資するために，昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年１回地方において開催してきた。平成５年度は次のとおり開催された。

会　　場　秋田市立千秋美術館

会　　期　平成５年７月24日（土）～８月29日（日）

主　　催　東京国立文化財研究所・秋田市立千秋美術館

開催日数　35日間

入場者数　9692人

陳列点数　油彩・パステル61点，木炭デッサン50点，写生帖17冊，書簡３点，日記５冊，参考資料若干

図　　録　A４版変型，128頁，原色図版24頁，単色図版73頁

3．公開学術講座

美術部・情報資料部（第27回）

日　　時　平成５年11月19日（金）　18:00～20:30

会　　場　国立教育会館大会議室

講　　演　（1）　十五・十六世紀における唐絵とやまと絵　鈴木　廣之

（2）　台湾における近代美術の発達　　鶴田　武良

芸能部（第24回）

日　　時　　平成５年10月25日（月）18:00～20:30

会　　場　　パンセホール

テ ー マ　　歌舞伎の技法－浄瑠璃の継承と展開－

講 演(1)　　浄瑠璃から歌舞伎へ　　鎌倉　惠子

講 演(2)　　御注進のバリエーション　　丸茂美惠子

－「流星」（日月星昼夜織分）－

実演と話　　御注進の演技さまざま

演技と話　　中村　東蔵ほか

義太夫　　竹本綾太夫

三味線　　鶴澤寿治郎

（聞き手）鎌倉　惠子，丸茂美惠子

４．夏期学術講座

芸能部（第18回）

芸能部では，芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として，例年夏期４日間にわたる学術講座を，首都圏各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし，芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずる。

平成５年度は「能・狂言の演出と技法」というテーマを設けて羽田昶が担当し，７月12日から15日までの４日間にわたり実施した。受講者は慶応義塾大学，東京学芸大学，実践女子大学，お茶の水女子大学，早稲田大学，共立女子大学，法政大学，東京芸術大学，立教大学の各大学院生で，受講者数は23名。日程及びテーマ細目は下記の通りである。

７月12日（月）

能・狂言の「演出」の意義

研究史（１）－戯曲論－

研究史（２）－技法論－

７月13日（火）

謡とせりふ

狂言の囃子

能の所作と狂言の所作

7月14日（水）

技法の実際と変遷－録音録画資料による－（1）

技法の実際と変遷－録音録画資料による－（2）

技法の実際と変遷－録音録画資料による－（3）

7月15日（木）

能の流儀差

狂言の流儀差

質疑

5．博物館・美術館等保存担当学芸員研修

近年博物館，美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し，燻蒸室，保存・修理室などの保存に関係する施設設備が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし，これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場や教材がないのが現状である。そのため博物館，美術館などの学芸員の保存担当者を対象に，文化財の科学的保存に関する基本的な知識および技術について研修を行い，その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし，研修会を開催した。受講者数は22名。日程および講師は下記の通りであった。

7月19日（月）

開講式・オリエンテーション

保存環境総論－文化財の保存と環境－　保存科学部長　三浦　定俊

保存環境実習－温湿度測定器の取扱い－　三浦　定俊

7月20日（火）

劣化と保存各論－木－　国際文化財保存修復協力室長　西浦　忠輝

劣化と保存各論－石－　西浦　忠輝

劣化と保存各論－ガラス－　国際文化財保存修復協力室　朽津　信明

事　　業

劣化と保存各論－考古遺物－　修復技術部長　三輪　嘉六

7月21日（水）

修復材料各論－伝統材料－　第二修復技術研究室長　増田　勝彦

修復材料各論－合成樹脂－　名誉研究員　樋口　清治

劣化と保存各論－金属Ⅰ－　第三修復技術研究室長　青木　繁夫

劣化と保存各論－金属Ⅱ－　青木　繁夫

7月22日（木）

保存環境各論－温湿度－　三浦　定俊

保存環境各論－展示・梱包ケースの湿度調節－

国立歴史民俗博物館　神庭　信幸

保存環境実習－湿度の制御法－　三浦　定俊

7月23日（金）

保存環境各論－大気汚染とその影響－　生物研究室長　門倉　武夫

保存環境各論－室内汚染－　保存科学部主任研究官　佐野　千絵

保存環境実習－室内汚染の調査法－　佐野　千絵

保存環境各論－施設設計の指針－　文化庁文化財保護部　鷲塚　泰光

7月26日（月）

保存環境各論－光と劣化－　佐野　千絵

保存環境各論－照度基準－　神庭　信幸

保存環境実習－照度の測定と調節－　佐野　千絵

7月27日（火）

調査手法各論－化学分析－　化学研究室長　平尾　良光

調査手法各論－画像計測－　三浦　定俊

劣化と保存各論－油彩画－　国立西洋美術館　河口　公生

劣化と保存各論－漆－　第一修復技術研究室長　中里　壽克

7月28日（水）

生物被害／虫－害虫の生態と被害－　保存科学部調査員　山野　勝次

生物被害／カビ－要因とメカニズム－　保存科学部調査員　新井　英夫

劣化と保存各論－紙－　増田　勝彦

劣化と保存各論－東洋絵画の彩色層－第二修復技術研究室　尾立　和則

7月29日(木)

ケーススタディー　博物館における収蔵・展示の問題とその対策

物理研究室　石川　陸郎

佐野　千絵

美術館における収蔵・展示の問題とその対策

三浦　定俊

7月30日(金)

文化財科学の動向－歴史と現状－　　名誉研究員　馬淵　久夫

閉講式

6．国際研究集会

昭和52年から毎年行われている「文化財の保存に関する国際研究集会」は17回を数え，今年度は修復技術部が担当した。「漆文化の保存」をテーマに11月10日から12日までの3日間行われた。近年欧米に所在する漆芸品の保存に対する関心は急速に高まりつつあり，この機会に日本の基本的漆芸技術の啓蒙を図ると共に，日本内外の漆の科学的研究の成果を提示し合い，討議を重ねて漆文化財の国際的理解を深めることを目的とした。

発表者は国外8名，国内8名，その他に論文のみの発表者，ポスターによる発表者を加え，150名を越す参加者によって活発な討議が行われた。

名　称：The 17th International Symposium on the Preservation of Cultural Property: Conservation of Urushi Object（漆文化財の保存）

日　時：平成5年11月10日～12日

会　場：国立教育会館社会教育研修所（東京都台東区上野公園内）

題名および発表者

11月10日(水)

【基調講演】

Ⅰ．ロイヤル・オンタリオ博物館におけるラッカー製品の保存処置

事　　業

カナダ：ロイヤル・オンタリオ博物館　　マリアン・ウェッブ

II．日本における漆および漆芸品の保存

東京国立文化財研究所　　西川杏太郎

【セッションI】漆の歴史と伝統技法

1．日本の漆芸の流れ

帝塚山大学　　河田　貞

2．様々なラッカー技法，その歴史と修理

チェコ：修復家　　アレナ・スカロバ

3．日本の伝統漆芸技法

東京国立文化財研究所　　中里　壽克

11月11日(木)

【セッションII】修理の実際

4．日本の漆芸品の修理

修復家　　北村　昭斎

5．漆芸品の保存修理と復元修復について

東京国立博物館内漆工修理室　　小西　暐也

6．ヨーロッパで行った日本漆芸品の修理

修復家　　新井　榛名

7．日本の舞楽面と伎楽面の科学的調査

ドイツ：デルナー研究所　　アンドレアス・ブァメスター

8．在欧文化財の修理における漆使用の諸相と問題点

ドイツ：修復家　　バーバラ・ピアート・ボルガーズ

9．中国の乾漆彫刻の調査と処置

米国：スミソニアン研究機構・フリーア美術館　　ポール・ジェット

11月12日(金)

【セッションIII】漆の科学

10．日本の伝統的漆芸技法 －なやし，くろめ，呂色－

東京大学名誉教授　　熊野谿　従

11．日本における漆の科学的研究の現状

東京国立文化財研究所　　佐野　千絵

12．ドイツにおける伝統的塗装技法　－その概要と修理のケーススタディー

ドイツ：バイエルン州立文化財研究所　　カタリーナ・ヴァルヒ

13．西洋塗装の科学的分析　－系統的方法とケーススタディー

ドイツ：デルナー研究所　　ヨハン・コラー

14．中国における漆の科学的分析

中国：商業部西安生漆技法と修理　　郭　　時清

【セッションⅣ】パネルディスカッション　－修理理論－

座　長：武蔵野美術大学　　田辺三郎助

パネラー：　　北村　昭斎

小松　大秀

鈴木　規夫

アレナ・スカロバ

アンドレアス・ブァメスター

マリアン・ウェッブ

ポール・ジェット

【ポスターセッション】

「漆製品の下地技法」

国立歴史民俗博物館　　永嶋　正春

「漆とは何か　－視覚的な漆の理解－」

熊野谿　従

「伝統的漆塗工程」「蒔絵粉の種類」

東京国立文化財研究所

7．アジア文化財保存セミナー

世界的視野の中で，いくつかの文明の拠点を持つアジアには，数千年の歴史の中で産み出され伝承されてきた文化財が，さまざまな状況の中で保存されている。それらの文化財は，各時代に各地域で栄えた固有の文化の証であ

り，当事国の財産であると同時に，人類共通の遺産でもある。本セミナーは，東アジア，東南アジア，西南アジアの諸国に呼びかけ，文化財の保存に関連する基礎的情報を交換し，将来の多国間の共同研究・共同事業を推進するための礎を築くことを目的として企画されたものである。本年度はその第4回目として，「文化財保存における伝統的な材料と技術」をテーマとして開催された。

会議は，2名の基調講演発表者と15カ国代表15名のカントリーレポート報告者，さらに，4名の考古，美術工芸，保存の専門家で構成される日本代表デスクが加わり，円卓を囲んで行われた。また，文化財保存の専門家約30名がオブザーバーとして参加し，活発な討議が行われた。日程等内容は下記の通りである。

名　称　　アジア文化財保存セミナー
　　－文化財保存における伝統的な材料と技術－

主　催　　文化庁・東京国立文化財研究所・奈良国立文化財研究所

協　力　　京都国立博物館・奈良国立博物館・東京国立博物館・
　　ユネスコ・アジア文化センター
　　（財）なら・シルクロード博記念国際交流財団

場　所　　奈良県新公会堂　他

日　程

10月29日（金）　　開会式およびレセプション（上野精養軒）

10月30日（土）　　国外参加者の視察・見学

10月31日（日）

1．東京国立文化財研究所長　西川杏太郎（基調講演）
　「美術工芸品保存における伝統的な材料と技術」

2．中国歴史博物館保存研究室長　潘　　路
　「古代中国青銅製品の修理と保存」

3．マレーシア国立博物館保存室長　Z．イタムオスマン
　「マレーシアでの金属文化財保存のための伝統的な材料と技術」

4．ブータン文化局文化財部主任　D．ワンチュク
　「ブータンにおける文化財保存のための伝統的な材料と技術」

5．インド国立文化財保存研究所分析科学室長　B. V. カルバーデ
「伝統的な保存方法：インドの場合」

6．モルディブ国立言語歴史研究センター研究官　I. ワヒード
「モルディブにおける伝統的な保存について」

11月1日（月）

7．イクロム科学技術事業部長　M. L. タバッソー（基調講演）
「イタリアにおける石と壁画の保存への伝統的な材料の使用－本当に有効かそれとも夢物語か－」

8．文化庁建造物課文化財調査官　稲葉　信子
「日本の文化財建造物保存修復における材料と技術」

9．韓国国立文化財研究所研究員　裵　　乗宣
「韓国の木造建築の伝統技法とその応用」

10．ユネスコ・アジア文化センター
「ユネスコ・アジア文化センターの事業紹介」

11．フィリピン国立歴史研究所建造物修復主任　R. A. イノベロ
「ミンダナオ島のトロガーナ住宅の保存へのマトリックスアプローチ」

12．ネパール考古局主任　T. N. ミシュラ
「ネパールの歴史的建造物の保存に用いられた伝統的な材料と技術」

13．インドネシア・ボロブドール保存研究所技術部長　スプヤントロ
「クドゥスの彫刻のある木造家屋の伝統的保存方法」

14．ヴェトナム文化情報省保存博物館局　フン・コック・グエン
「ヴェトナムにおける文化財保存のための伝統的な材料と技術」

11月2日（火）

15．タイ芸術総局博物館部保存課長　C. アラニャナク
「タイにおける伝統的織物の保存」

16．ユネスコ・スリランカ文化三角地帯プロジェクト保存部長
N.P.デシルバ
「絵画の保存における伝統的な材料と技術：スリランカでの経験」

事　　業

17. ラオス情報文化省博物館考古局長　T.サヤボンハムディー

「王宮博物館での保存作業に用いられる伝統的な材料と技術」

＜午後＞京都国立博物館文化財保存修理所視察

11月3日（水）

総合質疑応答・総合討議

座長　　国際文化財保存修復研究センター理事　　馬淵　久夫

イクロム科学技術事業部長　M.L.タバッソー

閉会式

11月4日（木）

サイトセミナー（外国人招待者のみ）

奈良国立文化財研究所，法隆寺，薬師寺

8．第2回「紙の保存修復」の国際研修

世界の紙の修復専門家14名（14カ国）を集め，文化庁および国際文化財保存研究センター（ICCROM）と共同主開催で「紙の保存修復」国際研修を行った。脆弱な古文書や版画など，紙を素材とした文化財の修理では，世界の文化財に日本の表具技術が役に立つ事が知られるようになっている。この研修では，この日本の表具技術を伝えることを目的とした。

3週間の研修は表具の基本的な技術を参加者が経験できるような内容の実技研修を中心としたが，日本の文化史・文化財保護法の沿革・文化財に使われている伝統的な素材・和紙と洋紙の特性等についての講義を行うとともに，研修旅行では和紙の紙漉場で修復材料である和紙をより深く理解するようつとめた。

海外から，より正確な技術を求める声が増える中，このような日本の専門家の直接の指導のもとで行われる研修会は意義は深いと確信している。

＜主催＞

東京国立文化財研究所

文化庁

イクロム（ICCROM）

INTERNATIONAL CENTRE FOR THE STUDY OF THE

事　業

PRESERVATION AND THE RESTORATION OF CULTURAL PROPERTY

＜協力＞　京都国立博物館

＜期間＞　平成４年11月23日～12月16日　(20日間)

＜場所＞　11月24日～25日　東京国立文化財研究所
11月26日～12月14日　京都国立博物館
スタディーツアー　奈良市・奈良県宇陀郡吉野町

＜参加者＞

ALCOCK Johann Pamela
アルコック・パメラ
オーストラリア ヴィクトリア文化財保存センター
ROSENBERGER Helga
ローゼンバーガー・ヘルガ
オーストリア 芸術アカデミー
CHEROUTRE Rosa-Anna-Maria
シュルートル・ローザアンナマリア
ベルギー 王立ヘント 美術アカデミー
MENEI Eve Marie Catherine
ムネイ・イヴマリーカトレーヌ
フランス芸術作品修復研究所
SIMON Claus-Ullrich
シモン・クラウスウルリッヒ
ドイツ 交通と技術博物館
Perumal P.
ペルマル
インド サラスヴァティマハール図書館

事　　業

RIMON Hasia

リモン・ハシア

イスラエル テルアヴィヴ美術館

GUGLIELMI Mara

グリエルミ・マーラ

イタリア ヴェネツィア東洋美術館

WOJTCZAK Mirosława

ウォッチャク・ミロスワァーワ

ポーランド 文化財保存修復研究所

KORAPIN Taweta

コラピン・タウェタ

タイ国立文書館

KANTARCİOĞLU　Ayse Serda

カンタルショウル・アイセ・セルダ

トルコ文化省 修復保存中央研究所

WHEELER　Michael John

ウィーラー・マイケル・ジョン

ニュージーランド オークランド市立美術館

WITHYCOMBE　Celia Rosamund

ウィティコム・セリア・ロザムンド

イギリス フィッツウィリアム 博物館

RICHMOND　Alison Taylor

リッチモンド・アリソン・テイラー

イギリス ヴィクトリアアルバート博物館

9．会　　議

(1)　第1回国際文化財保存修復協力センター＜仮称＞設置に関する調査研究会

世界の文化財の保存，修復に関する国際的な研究交流，保存修復事業への協力，専門家の養成，情報の収集と活用等を実施し，文化財保護における国際的な責務を果たすとともに，文化財の保存修復に関する研究の向上に資することを目的とする国際文化財保存修復協力センター＜仮称＞設置のための調査研究会として，外部の専門家，文化庁および東文研関係者が出席し，センターの設置目的，事業内容，組織，管理運営，施設等に関する事項について，検討，協議を行った。

日　時　平成6年3月17日（木）

場　所　別館会議室

出席者　東文研15名，外部（文化庁，大学，国際機関他学識経験者）16名

総　括　本調査研究会における検討，協議内容は次のように総括される。

文化財は人類共通の遺産であり，国家，民族を越えてその保存・修復にあたらなければならず，そのためには国際協力が不可欠である。文化財保護法のもと，文化財保護体制・技術・研究の整っている日本がこの面で果たすべき役割はきわめて大きく，実際，世界各国から多くの協力を求められている。これらの要請に対処するため，東京国立文化財研究所に国際共同研究，情報の収集と提供，人材養成を3本の柱とした国際的な協力センターを設立することがぜひ必要である。今後，調査研究をさらに拡大，進展させ，アジア地域を含む世界の文化財の保存修復に協力する。国際文化財保存修復協力センター＜仮称＞設置に向けての具体的な準備作業を推進すべきである。

(2)　文化財保存修復研究協議会

主　題　　古代鉄の保存科学

事　　業

日　時　　平成５年10月15日(金)

場　所　　東京国立文化財研究所別館会議室

主　旨　　古代において，鉄がどのように造られ，流通したかという問題は考古学の立場からも，科学技術の立場からも興味深い問題点である。古代鉄の産地・時代・技法などに関する問題の解明に対して現在，自然科学がどのような役割を果たしているか，今後の問題も含めて討議した。あわせて，鉄器に用いられている新しい科学的保存処置法について報告した。

講　演

考古学からみた古代鉄	東京国立文化財研究所	三輪　嘉六
古代鉄の化学組成	武蔵工業大学	平井　昭司
金工と鉄	東京国立文化財研究所	廣井　雄一
現代のたたら	文化庁伝統文化課	大滝　幹夫
古代鉄器の14C 年代測定	東北大学	井垣　健三
鉄器の保存処理	東京国立文化財研究所	青木　繁夫

10. 国際・国内交流

(1) 平成5年度職員の海外渡航

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
門倉武夫	中華人民共和国	環境汚染が文化財に及ぼす影響に関する研究	自平成5年4月28日 至平成5年5月9日	私費
中里壽克	〃	東洋の漆に関する国際シンポジウム（ISOL）出席	自平成5年4月30日 至平成5年5月7日	〃
佐野千絵	〃	〃	〃	〃
三輪嘉六	〃	敦煌莫高窟壁画の保存協力	自平成5年6月11日 至平成5年6月25日	科学研究費
増田勝彦	〃	〃	〃	外国旅費
西浦忠輝	〃	〃	〃	〃
勝木言一郎	〃	〃	〃	〃
朽津信明	〃	〃	〃	科学研究費
鶴田武良	〃	現代中国絵画動向調査	自平成5年5月22日 至平成5年5月30日	(財) 日中友好会館
三浦定俊	ドイツ	天然樹脂塗膜の材質・技法・保存に関する調査研究	自平成5年7月1日 至平成5年7月11日	科学研究費
佐野千絵	〃	〃	〃	〃
尾立和則	〃	〃	〃	〃
島尾新	中華人民共和国	「日中美術における西湖」シンポジウム参加及び浙江地方の調査	自平成5年7月1日 至平成5年7月11日	私費
西浦忠輝	スリランカ	イコモス総会・国際シンポジウム出席及び遺跡保存状況調査	自平成5年7月26日 至平成5年8月9日	〃
増田勝彦	米国	在米日本古美術品作品調査	自平成5年8月2日 至平成5年8月6日	(財) 芸術研究振興財団
岡田健	中華人民共和国	龍門石窟千五百周年国際シンポジウム出席	自平成5年8月31日 至平成5年9月14日	国際研究集会派遣研究員派遣費
平尾良光	米国，カナダ	商代青銅器の鋳造技法の調査	自平成5年9月12日 至平成5年9月21日	科学研究費

事　　業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
増田勝彦	オーストリア	イクロム「紙の保存修復」の国際研修講師	自平成5年9月1日 至平成5年9月15日	イクロム
西浦忠輝	フランス	アンコール遺跡保存技術会議出席	自平成5年9月10日 至平成5年9月17日	科学研究費
西川杏太郎	中華人民共和国	敦煌莫高窟壁画の保存協力	自平成5年9月30日 至平成5年10月12日	外国旅費
中野照男	〃	〃	〃	〃
勝木言一郎	〃	〃	〃	科学研究費
西浦忠輝	〃	〃	〃	〃
三浦定俊	〃	〃	〃	国際研究集会派遣研究員派遣費
尾立和則	〃	〃	〃	文化財保護振興財団
朽津信明	中華人民共和国，ベルギー，フランス	石造文化財の保存，修復に関する調査研究	自平成5年9月30日 至平成6年7月29日	文部省在外研究員費
岡田健	タイ，インドネシア	彫刻関係資料収集と現地調査	自平成5年10月12日 至平成5年11月4日	科学研究費
三浦定俊	イタリア	イクロム総会出席	自平成5年10月17日 至平成5年10月25日	科学研究費
島尾新	米国	在米日本古美術作品の調査	自平成5年11月26日 至平成5年12月15日	古文化財科学研究会
岡田健	〃	〃	〃	〃
野久保昌良	〃	在米日本古美術作品の写真撮影	〃	〃
長岡龍作	〃	在米日本古美術作品の調査	自平成5年11月27日 至平成5年12月10日	〃
佐藤道信	英国	河鍋暁斎作品調査	自平成5年11月29日 至平成5年12月4日	私費
三浦定俊	タイ	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究	自平成5年12月6日 至平成5年12月16日	科学研究費
西浦忠輝	〃	〃	〃	〃
松本修自	〃	〃	〃	〃
勝木言一郎	中華人民共和国	河北省，河南省の石窟調査	自平成6年2月1日 至平成6年2月7日	私費

氏　名	渡航先	目　　的	期　　間	旅費の出所等
中里壽克	ポルトガル，イタリア	漆文化財の保存処置に関する指導及び調査研究	自平成6年2月14日 至平成6年3月5日	国際交流基金
増田勝彦	〃	〃	〃	〃
島尾新	米国	ボストン美術館所蔵室町水墨画の調査	自平成6年3月1日 至平成6年4月10日	ボストン美術館
中野照男	〃	在米日本美術作品の調査	自平成6年2月24日 至平成6年3月11日	古文化財科学研究会
尾立和則	〃	〃	〃	〃
岡田健	〃	〃	自平成6年2月24日 至平成6年3月8日	〃
野久保昌良	〃	在米日本美術作品の写真撮影	自平成6年2月24日 至平成6年3月11日	〃
富澤邦明	〃	在米日本美術作品の調査等のための協議等	自平成6年2月24日 至平成6年3月5日	〃

(2)　招へい研究員等

国外招へい研究員

氏　　名	国　籍	役　　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
張　徳勤	中華人民共和国	国家文物局長	5. 4.12 ～ 5. 4.21	日中文化交流に関する文化財関係諸機関との協議	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
汪　格林＊	中華人民共和国	国家文物局・研究室	5. 4.12 ～ 5. 4.21	日中文化交流に関する文化財関係諸機関との協議	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
余　昌祥	中華人民共和国	国務院秘書三局副処	5. 4.12 ～ 5. 4.21	日中文化交流に関する文化財関係諸機関との協議	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
呉　　華＊	中華人民共和国	国家文物局外事処長	5. 4.12 ～ 5. 4.21	日中文化交流に関する文化財関係諸機関との協議	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
晋　宏逵＊	中華人民共和国	国家文物局文物一処副処長	5. 4.12 ～ 5. 4.21	日中文化交流に関する文化財関係諸機関との協議	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
金　正耀＊＊	中華人民共和国	中国社会科学院世界宗教研究所副研究員	5. 9. 1 ～ 5. 9.30	中国製青銅器の鉛同位体比に関する共同研究	保存科学部 平尾良光

事　　業

氏　　名	国　籍	役　　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
段　文傑	中華人民共和国	敦煌研究院・院長	5.10.28 ～ 5.11. 9	敦煌莫高窟の保存に関する日中共同研究の協議等	修復技術部 三輪嘉六
劉　会林＊	中華人民共和国	敦煌研究院・副院長	5.10.28 ～ 5.11. 9	敦煌莫高窟の保存に関する日中共同研究の協議等	修復技術部 三輪嘉六
劉　永増	中華人民共和国	敦煌研究院資料センター・次長	5.10.28 ～ 5.11. 9	敦煌莫高窟の保存に関する日中共同研究の協議等	修復技術部 三輪嘉六
KRIST, Gabriela	オーストリア	Programme Officer, ICCROM	5.11. 8 ～ 5.12.22	「紙の保存修復」の国際研修準備及び実施	修復技術部 増田勝彦
王　軍	中華人民共和国	国家文物局文物二処副処長	5.11.30 ～ 6. 5.30	中日両国土質遺跡の保存の比較研究	修復技術部 三輪嘉六
王　旭東＊	中華人民共和国	敦煌研究院保護研究所研究実習員	5.12.22 ～ 6. 3.21	敦煌莫高窟の環境に関する研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
SCHOLZ, Stanca	ドイツ	Institut für Ostasienkunnde Professor	6. 1.25 ～ 6. 1.30	江戸期における能・狂言の受容と実態及び初期歌舞伎との関わり	芸能部 羽田　昶
TOKITA, Alison ＊	オーストラリア	Senior Lecturer, Japanese Studies, Monash University	6. 2. 1 ～ 6. 2. 6	日本の語り物音楽についての知見を交換	芸能部 蒲生郷昭
MORGOS, Andras ＊	ハンガリー	ハンガリー国立博物	6. 2.20 ～ 6. 2.25	石造文化財の化学処理について	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
GRATTAN, David ＊	カナダ	カナダ国立文化財保存研究所保存技術研究室長	6. 2.20 ～ 6. 2.25	文化財保存の合成樹脂の応用に関する研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
DALEY, Thom ＊	カナダ	カナダ国立文化財保存研究所主任研究官	6. 2.20 ～ 6. 2.25	国際共同研究，国際協力に関する討議	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
BRUNET, Jacques ＊	フランス	歴史記念物研究所洞窟壁画保存室長	6. 2.28 ～ 6. 3. 5	敦煌莫高窟壁画の調査についての研究討議等	保存科学部 三浦定俊
EDET, Abu Solomon	ナイジェリア	国立博物館保存科学部長	6. 2.28 ～ 6. 8.31	民具および青銅遺物の保存修復研究	修復技術部 青木繁夫

氏　　名	国　籍	役　　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
PREYSS, Anna *	ドイツ	バイエルン国立博物館 油絵修復専門家	6. 3. 6 ～ 6. 3.11	油絵のワニスの除去・更新の技術及び天然樹脂と合成樹脂双方の使用法と劣化特性	修復技術部 川野邊渉
UNG VON	カンボジア	アンコール保存事務所保安官	6. 3. 7 ～ 6. 3. 9	アンコール文化遺産保護に関する共同研究	修復技術部 三輪嘉六
TUON PHOK	カンボジア	アンコール保存事務所現地責任者	6. 3. 7 ～ 6. 3. 9	アンコール文化遺産保護に関する共同研究	修復技術部 三輪嘉六
KONG SAR-ITH	カンボジア	アンコール保存事務所現地責任者	6. 3. 7 ～ 6. 3. 9	アンコール文化遺産保護に関する共同研究	修復技術部 三輪嘉六
CHEY SAM SAVANN	カンボジア	国立博物館修復責任者	6. 3. 7 ～ 6. 3. 9	アンコール文化遺産保護に関する共同研究	修復技術部 三輪嘉六
姜　大一*	大韓民国	韓国文化財研究所専門員	6. 3. 9 ～ 6. 3.16	環境汚染による金属文化財の腐食の現状と保存対策に関する研究	修復技術部 三輪嘉六
李　奎植*	大韓民国	韓国文化財研究所保存科学研究室	6. 3. 9 ～ 6. 3.16	環境汚染による金属文化財の腐食の現状と保存対策に関する研究	修復技術部 三輪嘉六
CHACE, Tom *	米　国	フリーア美術館・サックラー美術館保存科学部長	6. 3.14 ～ 6. 3.21	日本出土の青銅器及び商周時代の青銅器について	保存科学部 平尾良光
BABOIAN, Robert *	米　国	テキサスインストルメント特別研究員	6. 3.17 ～ 6. 3.23	環境汚染による金属文化財の腐食の現状と保存対策に関する研究	修復技術部 三輪嘉六
ROJPOJ-CHANARAT, Vira ※	タイ	教育省芸術総局考古部保存専門官	6. 3.21 ～ 6. 3.28	考古遺物の保存・修復処置に関する調査研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
KANGSARI-KIJJA, Ajara ※	タイ	教育省芸術総局考古部保存専門官	6. 3.21 ～ 6. 3.28	考古遺物の保存・修復処置に関する調査研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
TABPETCH, Sumet ※	タイ	教育省芸術総局考古部保存専門官	6. 3.21 ～ 6. 3.28	考古遺物の保存・修復処置に関する調査研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
ÖZGÖNÜL Nimet ※	トルコ	中東工科大学建築学部講師	6. 3.21 ～ 6. 3.29	建築装飾部材の保存・修復処置に関する調査	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝

事　　業

注1）＊は研究所予算で招へいしたことを表す。※は一部研究所予算で招へいしたことを表す。
　　＊＊は3.7.1 の来日であるが，平成5年度については上記期間のみ研究所予算で招へいしたことを表す。
注2）国際研究集会（8名），アジア文化財保存セミナー（15名），「紙の保存修復」の国際研修（14名）の国外招へい研究員等については各々の項に記載した。

国内招へい研究員

氏　名	現　　職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
須藤　弘敏	弘前大学人文学部 助教授	5.11.21 ～ 5.12. 4	美術史情報処理システムの研究 －データの共有化を中心として－	写真資料研究室 長岡　龍作
河合　眞澄	愛媛大学教養部助教授	6. 3. 1 ～ 6. 3.25	歌舞技芸風の研究 －安原コレクションSPレコードを使って－	演劇研究室長 鎌倉　惠子
高橋　　建	鳥海町教育委員会 主任兼社会教育主事	6. 3.14 ～ 6. 3.25	秋田の番楽に関する研究	民俗芸能研究室長 中村　茂子
脇田　久伸	福岡大学理学部教授	6. 3.18 ～ 6. 3.28	錆の保存科学的研究	化学研究室長 平尾　良光
西尾太加二	静岡県埋蔵文化財調査研究所　調査研究	6. 3. 7 ～ 6. 3.12	出土木製品の保存処理に関する研究	第三修復技術研究室長　青木　繁夫
西山　要一	奈良大学文学部助教授	6. 3.14 ～ 6. 3.19	奈良盆地における環境汚染の研究	修復技術部長 三輪　嘉六
山口　泰弘	三重県立美術館学芸員	6. 3.15 ～ 6. 3.26	美術史情報処理システムの研究 －データの共有化を中心として－	写真資料研究室 長岡　龍作

(3) 平成5年度海外研究者等の来訪

氏　　名	国　　籍	所　　属　　等
TRAN, Ky Phuong	ヴェトナム	チャンパ彫刻博物館主任学芸員
NOR, Dato Zakiah	マレイシア	国立公文書館館長
王文章　外2名	中華人民共和国	中国三門峡市副市代表団
馬永源　外6名	中華人民共和国	「上海博物館展」中国側代表団
YE, Tut	ミャンマー	文化省文化施設局長
MALEK SHAHMIRZADI, Sadegh	イラン	テヘラン大学文学部考古学科助教授
王振江	中華人民共和国	中国社会科学院考古研究所副研究員
南時鎭　外2名	大韓民国	文化体育部文化財管理局慶州文化財研究所・建築事務官
KHOO, Boo Chia	マレイシア	ペナン州立美術博物館館長
李浩官　外40名	大韓民国	韓国文化財管理者代表団
朴鍾聲　外14名	大韓民国	韓国報道関係者代表団
LEFORT, Philippe	フランス	フランス外務省　二等参事官

V．研究施設・設備

1．蔵　　書

美術関係図書

日本・東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全般にわたる研究所を中心に，関連図書，各種叢書，辞典類など和漢書(41,600)，洋書(4,110)，計45,710冊のほか，各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書，美術関係雑誌，紀要類，売立目録，展覧会目録などを所蔵し，所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸，その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書9,861冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第１次）・テアトロ（第１次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌，それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学部・修復技術部関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書，技術史，または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの，修理工事報告書及び物理学・生物学部門の保存科学に関連和洋書を合わせて3,128冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表のとおりである。

区　分	美術関係		芸能関係		保存科学・修復技術関係		計
	和漢書	洋　書	和漢書	洋　書	和漢書	洋　書	
５年度	606冊	32冊	329冊	14冊	28冊	5冊	1,014冊
総　数	41,600冊	4,110冊	9,722冊	139冊	2,097冊	1,064冊	58,732冊

2．資　　料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と，購入写真，複写写真による補足整備に加えて，印刷物中の図版をおさめるという方式で，当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全域にわたり，それぞれ絵画，書籍，彫刻，工芸，建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点，原板保有量はほぼ3分の1にあたり，別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか，拓本，作家伝記資料，落款印章資料，近代・現代作家・団体・作品資料，資料スクラップ等と，図書カード，図版カード，各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード，録音テープ，シネフィルム，ビデオテープ，写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには，毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか，昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは，明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので，近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ，ビデオテープ，及び写真は，雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので，奏演法の解析を中心とした写真，テープ，あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は，つぎのとおりである。

区　分	録音テープ		シネフィルム		ビデオテープ	
	analog	digital	8mm	16mm	β，VHS方式	8mm
平成5年度	16本	2本	0本	0本	29本	28本
合　計	2,868本	336本	198本	4本	363本	67本

区　分	音　盤　等		
	SP･LP	CD	VHD･LD
平成５年度	0枚	0枚	0枚
合　計	7,118枚	62枚	16枚

3．主要機器・設備

美術部・情報資料部		
名　称	使　用　目　的	備　考
X 線透過撮影装置	軟 X 線照射による絵画・彫刻の顔料・構造等の非破壊分析。	
紫外線照射装置	紫外線照射による蛍光物質の分析。補絹・補彩領域の明別。	
顕微鏡装置	双眼実体顕微鏡による美術作品細部の非接触観察。	KARL ZEISS
赤外線テレビ	赤外線照射による墨線の抽出。下図・銘文等の解読。	浜松テレビ
ビデオイメージスコープ	内視鏡による彫刻作品等の内部観察。	オリンパス
ローカルエリアネットワーク	LAN による情報処理の円滑化。情報の統合・共有化。	NET ONE（アンガマンバス）
画像処理装置	ディジタル画像処理技術による多角的画像分析。画像データベースの試作。	NEXUS6800シリーズ
光ディスクファイリングシステム	大量の調書・カード類の一括管理。簡易画像データベースの試作。	RIFILE

芸　能　部		
名　　称	使　用　目　的	備　　考
舞台(視聴室)	日本の古典芸能を実演するのに必要最小限の広さを持ち，実技者を招いて研究のための試演を行う。またその実演を舞台に続く調整室で撮影し録音する。	間口 590cm 奥行き 485cm 残響時間0.30秒
録音室	実技者を招いて分析研究のための，良質な録音を行う。	間口 421cm 奥行き 670cm 残響時間0.15秒 アナログ・デジタルの録音可能。
メログラフ	音の高さと強さの細かい変化を正確に計り，分かりやすいグラフで記録して，音学的分析を行う。	型名　B／T
レーザー・ターンテーブル	レーザー光でアナログ・レコードを非接触で再生する。貴重なレコードを半永久的に使用できる。	エルプＬＴ－IX

保存科学部		
名　　称	使　用　目　的	備　　考
蛍光Ｘ線分析装置	金属，顔料，岩石，土器などの化学組成を非破壊的に測定する。理学電機製は可搬型である。	フィリップス PW1404LS，理学電機 TBF01
原子吸光分析装置	岩石，土器，金属などに含まれる元素組成を測定する。	ジャーレルアッシュAA8500
誘導結合プラズマ分析装置（ICP）	岩石，土器，金属などに含まれる元素組成を測定する。	セイコーSPS1100
質量分析装置	鉛，ストロンチウム同位体比測定から，青銅，岩石などの原料産地を推定する。	VG-Sector-J
イオンクロマト分析装置	岩石，錆中の陰イオン濃度や空気中の NO_x，SO_x 濃度の測定から錆の進行状況や，空気汚染の程度などを推定する。	横河電気 IC500P

研究施設・設備

名　　称	使　用　目　的	備　　考
電子スピン共鳴装置	遷移金属イオンや劣化に伴って生じるフリーラジカルの強度を測定し，劣化の進みかたや程度を推定する。	日本電子 JES－RE1X
化学発光計測装置	化学反応に伴って放出される微弱な光の強度を測定し，反応の進みかたや劣化の度合いを測定する。	東北電子 CL-100
走査型電子顕微鏡 低真空度走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに，構成元素の分布を調べ，構造・技法について情報を得る。	日本電子-JXA840，5800LV
工業用X線検査装置	透視撮影によって彫刻・工芸・考古遺物・などの構造や光電子撮影によって絵画の顔料を調べる。	フィリップス MG321他
減圧薫蒸装置	文化財加害生物を防除するための薫蒸法の研究・開発を行う。	SK2
微生物検体作成装置	微生物胞子の発芽に及ぼす風の影響を調べる。	小林精機 CP 型
ガスクロマトグラフ質量分析計	有機質文化財の構成物質および劣化の判定のためにガス状として有機物を分離し，有機分子の判定を行う。	日本電子 Automass
液体クロマトグラフ質量分析計	有機質文化財の構成物質および劣化の判定のために液体状態で有機物を分離し，有機分子の判定を行う。	日本電子 LX2000
DNA シーケンサ	文化財の劣化原因，生物等の遺伝子配列を調べ，種の判定を行う	ファルマシア

修復技術部		
名　　称	使　用　目　的	備　　考
太陽追跡暴露試験機	修復材料の耐候性試験をする。	スガ試験機
プラズマ装置	酸化した出土金属遺物を水素プラズマを利用して還元処理をする。	神港精機 MP1017
紫外線フェードメータ	塗料，有機質材料の耐候性試験	スガ試験機

名　　称	使　用　目　的	備　　考
大型ステージ顕微鏡	文書，染織品等を平置のまま構造を観察できる大型移動ステージ（1×1 m）を備えた光学顕微鏡	三啓 SLP－1000
走査型レーザー顕微鏡	レーザーを走査して，天然物などをきわめて深い焦点深度で観察し，立体的な情報を得ることができる。	レーザーテック ILM21

国際文化財保存修復協力室		
名　　称	使　用　目　的	備　　考
微小部付全自動X線回折装置	微量の試料で，顔料，金属，岩石などの鉱物同定を行う	マックサイエンス M18-XHF-SRA
レーザー回折式粒度分布測定装置	土器や煉瓦などの粒度を調べ，その特性を明らかにする	島津製作所 SALD-3000
比表面積・細孔分布測定装置	岩石や煉瓦などの劣化状況を把握する	島津製作所アサップ2400

4．黒田記念室

黒田記念室は，本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり，黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時，主として黒田家から寄贈されたものは，油絵125点，素描170点，写生帖等であるが，その後黒田照子夫人，樺山愛輔，田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは，「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

5．閲　覧　室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は，主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。

VI. 関係法規

◎文部省組織令(抄)（昭和59　政令第227号
最終改正　昭63政101号，197号）

第２章　文化庁

第３章　施設等機関

（施設等機関）

108条　文化庁長官の所轄の下に，文化庁に国立国語研究所を置く。

２．前項に定めるもののほか，文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

２．国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

３．国立文化財研究所及びその支所の名称，位置及び内部組織は，文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第115条　国立国語研究所及び国立文化財研究所は，法第５条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則(抄)（昭和28年　文部省令第２号
最終改正　平５文令14号）

第５章　文化庁の施設等機関

第４節　国立文化財研究所

第１款　名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9　国立文化財研究所の名称及び位置は，次の表に掲げるとおりとする。

名　　称	位　　置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2　東京国立文化財研究所

(所　長)

第117条　東京国立文化財研究所に，所長を置く。

2．所長は，所務を掌理する。

(内部組織)

第118条　東京国立文化財研究所に，庶務課，次の五部及び国際文化財保存修復協力室を置く。

(1)　美　術　部

(2)　芸　能　部

(3)　保存科学部

(4)　修復技術部

(5)　情報資料部

(庶務課の事務)

第119条　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

(1)　職員の人事に関する事務を処理すること。

(2)　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

(3)　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

(4)　経費及び収入の予算，決算その他会計に関する事務を処理すること。

(5)　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

(6)　庁内の取締りに関すること。

(7)　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条　美術部に，第一研究室及び第二研究室を置く。

2．第一研究室においては，わが国の上代，中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い，及びその結果の公表を行う。

3．第二研究室においては，わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い，及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条　芸能部に，演劇研究室，音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2．演劇研究室においては，演劇及びその保存に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

3．音楽舞踊研究室においては，音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

4．民俗芸能研究室においては，民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条　保存科学部に，化学研究室，物理研究室及び生物研究室を置く。

2．化学研究室においては，文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行い，並びにその結果の公表を行う。

3．物理研究室においては，文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

4．生物研究室においては，文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い，並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2　修復技術部に，第一修復技術研究室，第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2．第一修復技術研究室においては，木，漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的調査研究を行い，及びその結果の公表を行う。

3．第二修復技術研究室においては，紙，布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的，技術的調査研究を行い，及びその結果の公表を行う。

4．第三修復技術研究室においては，石，土又は金属を材料とする文化財の修復

に関する科学的，技術的調査研究を行い，及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3　情報資料部に，文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2．文献資料研究室においては，第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料（写真資料を除く）の作成，収集，整理，保管，公表，閲覧及び調査研究を行う。

3．写真資料研究室においては，第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成，収集，整理，保管，公表，閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保存修復協力室の事務)

第122条の4　国際文化財保存修復協力室においては，世界の文化財の保存修復に関する国際協力，資料収集，調査研究及びその結果の公表を行う。

(客員研究員)

第122条の5　東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2．客員研究員は，所長の命を受け，東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3．客員研究員は，非常勤とする。

東京国立文化財研究所要覧（平成５年度）

平成６年12月１日　　発　行

発行所　　東京国立文化財研究所

〒110　東京都台東区上野公園13-27
電話（3823）2241（代表）